

看護実践研究指導センター年報

— 創立10周年記念誌 —

1992. 3

千葉大学看護学部附属看護実践研究指導センター

10 周年を 迎 え て

千葉大学看護学部附属看護実践研究指導センター長

平 山 朝 子

本センターは、学部附属の施設であり、さらに全国共通共同利用施設である。こういった性格を持つ施設の存在自体は、看護学の高等教育を推進し、看護婦等の教育水準の向上を促す多様な対策を追究しなくてはならない本学部としては、重要な意義を持つ。

本施設が誕生して今年で10年を迎える。この時期に、これまでの実績を振り返り、今日の情勢に適合した本センターの社会的使命や役割を確認したい。本誌は、センターの教官の総意に基づき、編集・執筆されたものであり、今後のあり方を見直すためには貴重な資料である。

本センターでは、共同研究事業と看護婦の研修事業を行っている。また、創設以来文部省からの委託を受けた講習会を実施している。これらの活動が、今日までにどれだけの成果をあげたかを確認し、今後の方向についての議論を深めていきたい。

近年、看護専門職の生涯教育の大切さが強調されている。本センターの機能の1つである看護婦の研修を取り上げてみても、需要の質と量とを明確にしておく必要がある。わが国における需要と言え、当然のことながら、保健婦・助産婦・看護婦等さまざまな場にいる看護専門職が対象となる。

大学病院（医育機関）に働いている看護婦は約4万人であるが、就業看護婦は全体で40万人を超えている。これらのすべてを直接研修対象とするものではない。目標が指導者層の育成となるのは当然であるが、どのような指導者に狙いを定めるかが重要となる。こういった基本的な視点からの見直しも深められる。

わが国においては、看護学の大学も増えてきている。看護学の高等教育のあり方や大学の社会における役割については、今後様々な議論がなされると思われる。いずれにしても、看護学の高等教育機関においては、実践性の高い研究を推進し、実践活動と密着した教育をしていくことが求められる。

その意味では、本センターのように、一方で継続教育を実施しながら、大学教育の本

来の目的を追求していくことが重要な意味を持つと考えられる。したがって、これからは本センターも看護学部の一翼を担う機関として、一層の発展と充実を図っていかなくてはならない。

現時点では、本学の全学的な動向として、大学の諸活動を自ら点検・評価を行い教育研究水準の向上を目指して取り組む組織的な対策が明示されている。

10周年を契機に具体的な資料を提示することは、学部のあり方、とりわけ看護実践研究指導センターのあり方について、内外の議論を触発することとなろう。いずれにしても、看護学分野の現状では、このような機関が皆無であるだけに、責任の重大性を感じつつ運営に努力したい。

(1992, 1)

目 次

10周年を迎えて

I. 看護実践研究指導センター10年のあゆみ

1. 看護実践研究指導センター創立10周年にあたって	1
2. 教官, 委員, 事務官一覧	3
3. 全国共同利用施設事業別年度別利用者数一覧	5

II. センター事業報告（昭和57年度～平成3年度）

1. 共同研究員	
1) 共同研究員	9
2) 研究部別共同研究員一覧	10
2. 研修事業	
1) 研修事業10年の推移	16
2) 授業科目, 時間数一覧	17
3) 講師一覧	18
4) 施設別研修生一覧	22
3. 文部省委託国公立大学病院看護管理者講習会	
1) 国公立大学病院看護管理者講習会	26
2) 授業科目, 時間数一覧	27
3) 講師一覧	28
4) 受講生一覧	30
4. 文部省委託看護婦学校看護教員講習会	
1) 看護婦学校看護教員講習会	36
2) 授業科目, 時間数一覧	37
3) 講師一覧	38
4) 受講生一覧	40

III. 研究業績（昭和57年4月～平成3年12月）

1. 継続教育研究部	49
2. 老人看護研究部	55
3. 看護管理研究部	62

IV. 創立10年記念公開シンポジウム

71

編集後記

I. 看護実践研究指導センター10年のあゆみ

1. 看護実践研究指導センター創立10周年にあたって

看護実践研究指導センター

老人看護研究部 土屋 尚 義

看護学部附属看護実践研究指導センター（以下センター）は、全国共同利用施設として昭和57年4月1日に設置され、今年で満10周年を経過した。

本センターの設置目的は、“全国共同利用施設として、看護学の実践的分野に関する調査研究，専門的研修その他必要な専門的業務を行い，かつ，国立大学の教員その他の者で，この分野の調査研究に従事する者の利用に供することを目的とする”とされている。

すなわち，近年の社会構造や情勢の変化，医療技術の進歩に対応するためには，看護機能の質的向上が急務であり，そのために総合大学の学部機能に加えて卒後の社会人生涯研修，研究を主務とする全国共同利用施設の設立が，社会的需要に答えるために必須であったためと理解される。

この目的のために，全国国公立大学またはこれに準じる研究所の教員や研究員に対しては共同研究員制度（1年間），大学病院看護職員および教員に対しては研修制度（現在4月～10月の6カ月間）があり，これらに対する対応が発足当初からのセンターの主務であるが，この2つの事業とは別にさらに文部省委託事業として，看護婦長等看護管理者に対する国公立大学病院看護管理者講習会（現在7月中・下旬に10日間）と看護教員を対象とする看護婦学校看護教員講習会（現在8月～翌年2月の6カ月間）の2つがあり，現在これらの4つの事業が年間を通じて平行して実施されている。

これらの対象や目的はやや異なるが，いずれも看護の現場を支援し発展させるための科学的基盤を追及し，主体的に開発，実践する能力をもった指導者層の育成を目的として運営されている。

センター発足まで，千葉大学における4年制看護教育は，教育学部特別教科（看護）教員養成課程（昭和44年設置）と看護学部看護学科（昭和50年設置）の両学部で，それぞれやや異なったカリキュラムと教育理念に基づいて行われていた。当時は看護分野の教育，研究の大きな発展を期待して，看護大学の拡充と大学院研究科および専門研修研究施設の設置が強く望まれていた時代であった。このような社会的背景を基に，千葉大学の全学的な総合構想と文部省当局の指導，助言によって，教育学部は昭和57年度から同課程の学生募集を停止し，学生定員は看護学部に移行し，その時点で同課程の教職員は看護学部併任となり，昭和60年3月，13回生の卒業を最後に課程の幕を閉じて教職員全員が看護学部専任となり，以後千葉大学における看護学の教育，研究は，一元的に看護学部で行われることとなった。このような指導が，当時の教育学部の大学院教育学科設置概算要求の殆ど最終段階での，看護教育学専攻の妥当性に関する論議の中で，両学部重複の調整として急速に具体的に浮上してきたことは，その後示されるセンター構想に大きな示唆を与えるものであった。このようにして継続教育，老人看護，看護管理の3研究部，教官9名，教務職員1名，計10名（その後教官定員削減助手1名により9名）よりなる看護実践研究指導センターが発足した。

センターの組織や各事業の現状，具体的な利用状況，問題点などはそれぞれの項目について各担当者がまとめ，また資料として示すので詳細は省くが，発足当初の予想を遙かに上回る利用があり，現在までに各事業併せて計1,300余名が全国共同利用施設としてのセンターを利用し，その他研究生，委託研究

生、専攻生、外国人留学生など各若干名が研究部機能を利用して在籍した。さらに、とくに共同研究員および研修事業では応募者が年々ますます増加する傾向にあり、その運用に苦慮する現状にある。今後の需要予測に立脚して定員の拡大、機能の充実が必要な時期となっている。

設備的には発足時のセンター部分は23㎡の小部屋2つが研修生用に準備されているに過ぎなかったが、発足と同時に学部内外の協力を得て整備が進み、現在では一つの視聴覚教室、六つの研究室、四つの実験室、一つの実習室、三つのセミナー室が外部からの利用者に提供出来る専有スペースとなり、教育、研究資材も徐々に整備されつつある。またセンターは全国共同利用施設であることから、その事業計画や重要事項を審議するために学部外の学識経験者若干名を加えた運営協議会が設けられてある。

さらに近年の看護需要の増大に伴う看護系大学の急増は、他の領域にもましてその教官養成を急務なものとし、卒後生涯教育、社会人教育を本務とする当センターの果すべき役割には大きな期待が寄せられている。その場合短期的視点はともかくとして、長期的な展望にたった指導者、利用者両者の素質と継続的な努力が将来の看護教育の地位を決定するものであり、この点からもセンター教職員は一層身の引き締まる思いをしている。

センター教官の研究活動としては、平成3年末までに原著128件、学会発表646件、単行書128件、その他158件、計936件の研究業績を公表し、研究活動の面でも些かの成果をあげつつある。主たる学会活動は日本看護研究学会、日本看護学会、日本看護科学学会、日本母性衛生学会、日本老年社会科学会、日本病院管理学会、応用心理学会、心身医学会、日本建築学会、日本インテリア学会などであり、その他 Tel. Aviv., Manila, Wasington D. C., Borkum などで開催されたいくつかの国際学会や研究会にも発表を行ってきた。このような研究活動や情報提供に関する機能はセンターの主たる業務として今後一層重要な位置を占めるものとなろう。

センターの現在までの軌跡は、教育学部併任のままセンターの組織や施設、事業計画の立案、実施に努力した設置当初の3年間、そして専任となり施設、設備も一応完成して事業の定着、発展に努めた時期、さらに全国共同利用施設の存在と活動内容が認識されてますます広く利用されるようになったここ数年間に大別されるように思う。

しかしながらセンターは、現在の共同利用者の需要に応じる必要があると同時に、看護機能の将来の社会的需要の方向を予測して、これに対応し得る専門性の開発の先取りも重要な責務と考えている。10年を契機に現在までの活動を振り返り今後の方向を位置づけるために下記のような記念行事を計画した。

記念誌は現在までのセンターのあゆみをまとめ、シンポジウムは将来の方向を探ろうとするものである。関わりをもつ者全員の情熱のみが組織を磨き上げる。実りある十周年記念行事であることを期待したい。

なお現在までの活動状況の詳細については下記既刊刊行物を利用されたい。

千葉大学看護学部紀要Vol. 5, P. 71~81, 1983

千葉大学看護学部紀要Vol. 5~13, 1983~1991

看護実践研究指導センター年報No. 1~9, 1983~1991

千葉大学広報 第62号P. 1~5, 1991

2. 教 官 , 委 員 , 事 務 官 一 覧

看護実践研究指導センター職員

センター長 看護学部長

石黒 義彦 昭和57年

見藤 隆子 昭和58年～59年

石川 稔生 昭和60年～61年

吉武香代子 昭和62年～平成2年

平山 朝子 平成3年～

継続教育研究部

教 授 内海 滉 昭和57年～

助 教 授 鷗沢 陽子 昭和57年～

助 手 花島 具子 昭和57年～

老人看護研究部

教 授 土屋 尚義 昭和57年～

助 教 授 金井 和子 昭和57年～

助 手 吉田 伸子 昭和57年～

看護管理研究部

教 授 松岡 淳夫 昭和57年～平成2年

阪口 禎男 平成3年～

助 教 授 阪口 禎男 昭和57年～平成2年

助 教 授 草刈 淳子 昭和57年～

教務職員 山口 桂子 昭和57年～58年

川口 孝泰 昭和63年～平成3年

看護実践研究指導センター運営協議会

1号委員 看護学部長

同左

2号委員 センター長

同左

3号委員

薄井 坦子 昭和57年～昭和60年

見藤 隆子 昭和57年

内海 滉 昭和57年～昭和60年
平成2年～

土屋 尚義 昭和57年～

石黒 義彦 昭和58年～平成元年

吉武香代子 昭和61年

松岡 淳夫 昭和61年

平山 朝子 昭和63年～平成2年

前原 澄子 平成2年～

4号委員

大森 文子 昭和57年～昭和62年

佐藤 壱三 昭和57年～平成元年

日野原重明 昭和57年～平成3年

吉田 時子 昭和57年～昭和58年

伊藤 暁子 昭和59年～

中野 稔 昭和59年～平成元年

有田 幸子 昭和63年～

磯野 可一 平成2年～

看護実践研究指導センター運営委員会

1号委員 センター長

同左

2号委員

センター所属の教授・助教授

同左

3号委員

平山 朝子 昭和57年～平成2年

吉武香代子 昭和57年～昭和61年

杉森みどり 昭和57年～昭和62年

石黒 義彦 昭和62年～昭和63年

野口美和子 昭和63年～

前原 澄子 平成元年～

横田 碧 平成3年～

看護学部事務部

事務長

沼田 勝成 ～昭和59年

竹内 昭 昭和60年～昭和63年

山下 正明 平成元年～平成2年

泉水 喜雄 平成3年～

庶務係長

鈴木 保久 ～昭和59年

高橋 一郎 昭和60年～昭和62年

紺野 正之 昭和63年～平成元年

高柳 由和 平成2年～平成3年

会計係長

須藤 謙三 ～昭和58年

宇井 茂 昭和59年～昭和60年

田村 雅彦 昭和61年～平成元年

鈴木 国光 平成2年～

教務係長

古山 重夫 ～昭和59年

深野 博 昭和60年

増田 勝弘 昭和61年～平成3年

厚生係長

古山 重夫 併

深野 博 併

小川 光夫 昭和61年～昭和63年

(平成元年より教務・厚生係は学務係と変更)

3. 全国共同利用施設事業別年度別利用者一覽

事業		所属	昭和 57年	昭和 58年	昭和 59年	昭和 60年	昭和 61年	昭和 62年	昭和 63年	平成 1年	平成 2年	平成 3年	計
共同研究員	継続教育	国立	4	5	5	2	3	5	5	5	3	5	42
		公立	0	0	2	1	0	2	5	7	4	6	27
		私立	0	0	1	1	1	1	2	2	1	0	9
		小計	4	5	8	4	4	8	12	14	8	11	78
	老人看護	国立	1	2	2	1	0	0	1	3	4	3	17
		公立	0	1	2	4	4	3	0	1	3	3	21
		私立	1	1	2	3	5	8	3	3	3	4	33
		小計	2	4	6	8	9	11	4	7	10	10	71
	看護管理	国立	2	1	1	4	5	3	3	2	4	3	28
		公立	0	4	2	4	4	2	3	5	5	2	31
		私立	0	0	0	1	0	0	1	1	1	3	7
		小計	2	5	3	9	9	5	7	8	10	8	66
	計		8	14	17	21	22	24	23	29	28	29	215
研修事業	国立	9	6	6	7	6	9	13	7	9	9	81	
	公立	0	1	1	1	4	3	1	2	1	0	14	
	私立	3	1	1	2	3	2	6	6	5	6	35	
	計	12	8	8	10	13	14	20	15	15	15	130	
文部省委託 国公立大学病院 看護管理者講習会	国立	39	42	41	40	40	40	42	42	41	41	408	
	公立	6	6	7	7	5	7	7	5	8	6	64	
	私立	22	31	25	27	25	29	25	25	27	25	261	
	計	67	79	73	74	70	76	74	72	76	72	733	
文部省委託 看護婦学校 看護教員講習会	国立				17	17	18	18	17	17	16	120	
	公立				4	3	6	7	6	3	5	34	
	私立				17	16	14	14	17	16	18	112	
	計				38	36	38	39	40	36	39	266	
	総計(名)	87	101	98	143	140	152	156	156	155	156	1,344	

Ⅱ センター事業報告

(昭和57年～平成3年度)

1. 共同研究員

共同研究員

千葉大学看護学部看護実践研究指導センターが、同時に全国共同利用施設として設置された昭和57年4月から共同研究員の受け入れを開始した。それから、はや10年が経過し、その間、松岡前教授が多額の業績を残されて、昨年定年退官されている。

共同研究員は看護学の実践的分野に関する調査研究等を行なうに際し、この共同利用施設を利用して、センター教官と協力して共同研究を行なうのを、その目的としている。

これを3研究部についてみると、継続教育研究部は多様な学歴レベルの看護職に対する継続教育の必要性について調査研究を行ない、看護専門職固有の継続教育方法の確立を目指す。また、老人看護研究部は急速に進展する高齢化社会に対応する看護のあり方、生活障害改善のための生活行動援助技術等、老人に焦点を絞った看護実践の確立を目指して、対象及び看護者の両面からの調査研究を行なう。さらに、看護管理研究部は医療の高度化及び病院機能の複雑化に対応しうる看護管理のあり方について総合的に研究し、限られた看護資源のより効率的な運営方法の確立を目指すことをそれぞれの研究部の目的とした。

初年度は4大学8名の共同研究員が受け入れられたに過ぎないが、平成3年度迄の10年間に39校（延べ69校）に達し、共同研究員数も延べ215名を数えるに至っている。その内訳を国公私大別にみると、国立：87名、公立：79名、私立：49名である。

共同研究員研究の内容を各研究部毎に簡単に以下に記す。

継続教育研究部：

看護教員並びに病院看護婦の継続教育の実態に始まり、次いで、教育内容、教育方法について、一方、看護学生の生理心理的問題、意識構造、自我同一性、性意識、実習指導、卒業後の学習意識など研究テーマに沿った研究が行なわれてきた。

老人看護研究部：

老人の心理、身体、社会的側面の実態調査を手始めに、老人の健康行動、老人をとりまく生活環境、日常生活動作（食事、排泄、衣服の着脱）、老人の生活援助技術の開発、老人看護の質の評価、高齢患者の入院生活満足度、老人ホームの老人の心特性ならびに看護機能、痴呆老人、在宅ケアシステムなどを中心に、死の限界状況の看護（ホスピスも含めた）、さらには、看護学生の老人観などについての共同研究がなされてきた。

看護管理研究部：

看護診断用語、看護過程におけるアセスメント、看護婦のキャリア発達、看護機能と役割の設定問題、看護の質評価、職務満足、看護業務分析、看護行動の人間工学的研究（動線、体位変換、褥創、細菌学的）、病室の環境管理などの研究がなされて、各研究部とも、大きな成果を挙げていると自負している。

（阪口禎男）

継続教育研究部 共同研究員一覧

所属 \ 年度	昭和57年	昭和58年	昭和59年	昭和60年
弘前大学教育学部	木村紀美	木村紀美	木村紀美	花田妙子
筑波大学文芸・言語学系				
千葉大学教育学部				
徳島大学教育学部	高田節子	高田節子	高田節子	
熊本大学教育学部	木場富喜 花田妙子	木場富喜 花田妙子	木場富喜 花田妙子	
秋田大学医療技術短期大学部				川本利恵子 大谷真千子 中淑子
新潟大学医療技術短期大学部				
群馬大学部医療技術短期大学部				
岡山大学医療技術短期大学部				
山口大学部医療技術短期大学部		川本利恵子	川本利恵子	
徳島大学医療技術短期大学部				
長崎大学医療技術短期大学部				
千葉県立衛生短期大学			大谷真千子	
東京都立医療技術短期大学				
神奈川県立衛生短期大学			田中千鶴子	
福井県立短期大学				
愛知県立看護短期大学				中淑子
三重県立看護短期大学				
神戸市立看護短期大学				
東京女子医科大学看護短期大学				
東邦大学医療短期大学				
聖隷学園浜松衛生短期大学				
奈良文化女子短期大学				
産業医科大学医療技術短期大学			中淑子	
都立板橋看護専門学校				
横浜市立大学医学部附属高等看護学校				
秋田大学医学部附属病院				
計 (延べ78名・実人数34名)	4	5	8	4

昭和61年	昭和62年	昭和63年	平成元年	平成2年	平成3年
宇佐美 寛	芳 賀 純 宇佐美 寛	芳 賀 純 宇佐美 寛	芳 賀 純		
花 田 妙 子				松 尾 典 子	松 尾 典 子
	村 上 生 実	村 上 生 実	村 上 生 美 二 渡 玉 江 高 田 節 子	二 渡 玉 江	二 渡 玉 江 近 藤 益 子
川 本 利恵子				金 山 正 子	金 山 正 子 猪 下 光
	草 野 美根子 大 谷 真千子	草 野 美根子			
		森 下 節 子	森 下 節 子 佐 藤 みつ子	森 下 節 子 佐 藤 みつ子	森 千 鶴 佐 藤 みつ子
				上 岡 澄 子 竹ノ上 ケイ子	上 岡 澄 子 竹ノ上 ケイ子
		遠 藤 小夜子	遠 藤 小夜子		河 原 宣 子
		末 永 ちぢ代	末 永 ちぢ代 沢 田 和 美 松 下 由美子	松 下 由美子	
	張 替 直 美				
		早 田 き よ 坂 本 雅 代			
中 淑 子	小 池 妙 子	小 池 妙 子	小 池 妙 子		小 池 妙 子
		稲 見 すま子	稲 見 すま子		
	山 本 勝 則	山 本 勝 則	山 本 勝 則		
4	8	12	14	8	11

老人看護研究部 共同研究員一覧

所属	年度	昭和57年	昭和58年	昭和59年	昭和60年
産業医科大学医療技術短期大学		大 津 ミ キ	中 尾 久 子	大 津 ミ キ	
弘 前 大 学 教 育 学 部		木 村 宏 子			
弘前大学医療技術短期大学部			河 瀬 比佐子	河 瀬 比佐子	
熊 本 大 学 教 育 学 部			萩 沢 さつえ	萩 沢 さつえ	
神奈川県立衛生短期大学			宮 崎 和 子	山 田 泰 子	山 田 泰 子
埼玉県立衛生短期大学				大河原 千鶴子	大河原 千鶴子
東京女子医科大学看護短期大学				河 合 千恵子	河 合 千恵子
千葉県立衛生短期大学					児 島 和 枝
愛知県立看護短期大学					杉 野 佳 江
山口大学医療技術短期大学部					大 原 宏 子
聖マリア学院短期大学					大 津 ミ キ
銀 杏 学 園 短 期 大 学					(設立準備室)
東京都立医療技術短期大学					鶴 コトミ
滋 賀 県 立 短 期 大 学					
聖隷学園浜松衛生短期大学					
金沢大学医療技術短期大学部					
筑波大学医療技術短期大学部					
大坂大学医療技術短期大学部					
神戸市立看護短期大学					
愛媛県立医療技術短期大学					
帝 京 平 成 短 期 大 学					
計 (延べ71名・実人数43名)		2	4	6	8

昭和61年	昭和62年	昭和63年	平成元年	平成2年	平成3年
小 山 幸 代	小 山 幸 代		青 木 主 税		
				小坂橋 喜久代	小坂橋 喜久代
大 森 武 子	大 森 武 子	高 橋 真 理	斎 藤 やよい	金 沢 トシ子	横 山 淳 子
渡 辺 文 子	渡 辺 文 子	中 村 美 優	高見沢 恵美子	石 川 民 子	金 沢 トシ子
	高 橋 真 理	藤 野 文 代			石 川 民 子
	柳 沢 千 衣				本 江 朝 美
児 島 和 枝					
杉 野 佳 江				米 田 純 子	米 田 純 子
豊 沢 英 子	豊 沢 英 子				
坂 哉 繁 子	坂 哉 繁 子		中 尾 八重子	中 尾 八重子	
田 中 英 子	田 中 英 子				
大 原 宏 子			筒 井 裕 子		
	筒 井 裕 子				
	北 村 隆 子				
	和 田 清 子				
		泉 キヨ子	泉 キヨ子	泉 キヨ子	
			金 川 克 子		
				山 本 亨 子	山 本 亨 子
				城 戸 良 弘	城 戸 良 弘
				中 野 悦 子	
				河 野 保 子	河 野 保 子
					花 野 典 子
9	11	4	7	10	10

看護管理研究部 共同研究員一覧

所属 \ 年度	昭和57年	昭和58年	昭和59年	昭和60年
産業医科大学医療技術短期大学 弘前大学教育学部 千葉県立衛生短期大学	大串靖子	阿部テル子 加藤美智子 宮腰由紀子	加藤美智子 宮腰由紀子	加藤美智子 宮腰由紀子 宮崎和子
愛知県立看護短期大学		内海節子 神谷恵理子		山口桂子
大阪大学医療技術短期大学 徳島大学教育学部 聖路加看護大学 金沢大学医療技術短期大学部	野島良子		松木光子	野島良子 荒井蝶子 天津栄子 金川克子 伊敷和枝
琉球大学医学部保健学科 富山医科薬科大学附属病院 京都大学医療技術短期大学部 東京大学医学部保健学科 埼玉県立衛生短期大学部 群馬大学医療短期大学部 東京都立医療短期大学 大阪府立看護短期大学 東京女子医科大学看護短期大学				
長崎大学医療技術短期大学 山口大学医療技術短期大学 岡山大学医療技術短期大学 北里大学看護学部				
計（延べ66名・実人数33名）	2	5	3	9

昭和61年	昭和62年	昭和63年	平成元年	平成2年	平成3年
加藤 美智子 宮腰 由紀子 宮崎 和子 山口 桂子 天津 栄子 金川 克子 伊敷 和枝 出来田 満恵 近田 敬子	清水 美奈子 伊敷 和枝 近田 敬子 菅田 勝也 市瀬 陽子	 近田 敬子 菅田 勝也 市瀬 陽子 岩本 仁子 平林 千佳里 尾崎 フサ子 内布 敦子	加藤 美智子 林 香おる 浅井 美千代 坂井 明美 岩本 仁子 平林 千佳里 尾崎 フサ子 内布 敦子	木村 宏子 加藤 美智子 林 香おる 浅井 美千代 小野 清美 坂井 明美 岩本 仁子 尾崎 フサ子 宮下 弘子 鶴田 早苗	浅井 美千代 小野 清美 坂井 明美 内布 敦子 安酸 史子 松永 弥生 太田 にわ 鶴田 早苗
9	5	7	8	10	8

2. 研 修 事 業

研修事業10年の推移

全国共同利用施設としての当センターの設置目的を受けて、センター事業は(1)共同研究員の受け入れ(2)研修の実施を行う。この他に、文部省の委託を受けて(3)国公立大学病院看護管理者講習会(4)看護婦学校看護教員講習会を実施している。(2)にあたる国公立大学病院の指導的立場にある看護職員および看護教員に対する研修は、看護の現場で生じる諸問題の解決に資するための必要な知識および技術の修得を目的としている。臨床現場における医療の急速な進歩や変化に伴い、看護対応を迫られている問題は、医療の専門分化、先端技術の導入、対象の高齢化、長期慢性療養者の増加に対する対応である。そのためには、現状対応の実務的能力および将来志向の研究・開発能力を高めることが必要である。そのため研修中に修得した知識や技術を、各現場で生じている問題解決のための糸口として利用し、自発的な問題解決能力を高める訓練として、自らの問題意識に基づいて各人が設定したテーマに関する研究発表を行う。

初年度（昭和57年）には、移行措置としてセンターの専任教官が教育学部を併任し、またセンター開設に伴う諸準備へのかかわりもあり、試行として10月からの3カ月間の期間で研修を行った。この年センター教官も研修生もまさに死にものぐるいの年であった。翌58年からは研修期間を6カ月間として現在に至っている。6カ月間の研修内容は、看護学に関連する科目の講義270時間、演習・実習270時間、課題研究360時間、合計900時間である。

この研修への派遣大学は、北は札幌から南は琉球にまでおよんでいる。研修生は他の事業の参加者に比べて種々の年齢層にわたり、職位も副看護部長からリーダークラスまで含まれている。研修生の受け入れについては、希望者は所属長の推薦により応募するが当初10名の定員で行われた。しかしながらその後希望者は毎年増加し、平成2年度は36名に達した。21名まで受け入れた年もあったが、予算や施設の関係で現在は各研究部5名ずつ、計15名の枠が設けられておりその選考に苦慮している。しかし、この枠については、各病院看護部からその拡大を求める声が大きく、今後の定員増加が図られる必要があらう。

研修修了者の多くは、病院に戻ってから職位が昇格している。手元の資料では看護部長の要職に7名がつき、副部長には10名がついている。婦長職についた者も多い。この研修について研修生は、それまで経験することのできなかった新たな視点を相互に加える機会となったと評価している。研修終了後の同期生同士の横のつながりを大切にしており、1回生からの研修同窓会も設立され、相互の研鑽と親睦に活用されている。

（金井和子）

授業科目、時間数一覧

年 度	昭和 57年	昭和 58年	昭和 59年	昭和 60年	昭和 61年	昭和 62年	昭和 63年	平成 1 年	平成 2 年	平成 3 年
開始月日～	10.4～	7.4～	7.2～	9.2～	5.6～	4.13～	4.11～	4.14～	4.13～	4.11～
終了月日	12.25	12.24	12.22	3.1	11.1	10.3	10.1	10.7	10.5	10.4
	12週間	25	25	25	25	25	25	25	25	25
継続教育方法論	60時間	90								
援 助 技 術 論	60	90								
看 護 管 理 論	60	90	以下同じ							
看護学演習・実習	90	270								
看 護 研 究	120	360								
計	390	900								

継続教育分野科目講師名一覧

継続教育論（講義）

科 目 名	講師名	担当年度
教 育 哲 学	宇佐美 寛	昭57～
教 育 相 談	坂本 昇一	昭57～昭59
	坂野 雄二	昭60～昭61
	弘中 正美	昭62
	坂上 佑子	昭63～平 1
教 育 評 価	三浦 香苗	昭60～
社 会 教 育 史	福尾 武彦	昭57～昭59
社 会 教 育	長沢 成次	昭60～
科 学 基 礎 論	坂本 賢三	平 1～平 2
	土屋 俊	平 3～
行 動 科 学 研 究 論	実森 正子	昭57～昭59 昭63
心 理 学 研 究 論	箱田 裕司	昭57～昭62
	宮埜 寿夫	平 1～
人 格 研 究 論	青木 孝悦	昭57～
社 会 心 理 学	萩原 滋	昭60～昭62
	黒沢 香	昭63～
統 計 学	内海 滉	平 1～
看護基礎教育の目標	薄井 坦子	昭58～
看護教育課程論	杉森みど里	昭57～平 1
	高橋みや子	平 2～
看護継続教育論	内海 滉	昭57～
	鶴沢 陽子	昭57～
	樋口 康子	昭62～
	松林 恵子	平 2～平 3
看護研究論	内海 滉	昭57～昭58 昭60～
	鶴沢 陽子	昭57
	見藤 隆子	昭57～昭60
	木場 富喜	昭57～昭59
	高田 節子	昭57～昭59

科 目 名	講師名	担当年度
	樋口 康子	昭58～昭61
	木村 紀美	昭58～昭59
	花田 妙子	昭58～昭60
	花島 具子	昭59
	大谷真千子	昭59
	川本利恵子	昭59
	田中千鶴子	昭59
	中 淑子	昭60
継続教育論（演習）		
継続教育論演習	内海 滉	昭57～
	鶴沢 陽子	昭57～
施設見学		
見 学 ・ 実 習	花島 具子	昭57～
国立公衆衛生院	鈴木 武夫	昭57
	松野かほる	昭57～昭63
	宮里 和子	平 1～平 2
	湯沢布矢子	平 3～
厚生省看護研修	吉田 時子	昭57
研究センター	伊藤 暁子	昭57～平 2
	門脇 豊子	平 3～
日本赤十字社	小林 隆	昭57
幹部看護婦研修所	樋口 康子	昭57
日本看護協会	大森 文子	昭57
	忠政 敏子	昭57
神奈川県立	岩間 節子	昭58
看護教育大学校	三品 照子	昭59
神奈川県立婦人	金森トシエ	昭58～昭62
総合センター		
国立歴史民族博物館		昭58～

老人看護分野科目講師名一覧

援助技術論（講義）

科 目 名	講師名	担当年度
老人看護概説	土屋 尚義	昭57～
	金井 和子	昭57～
	渡辺 隆祥	昭59～昭61
	赤須 知明	昭62～
	遠藤千恵子	昭59～昭63
	七田 恵子	平1～
老化形態学	橋爪 壮	昭57～平2
	中村 宣生	昭57～昭62
	君塚 五郎	昭63～
	吉沢 花子	平3～
老化機能学	石川 稔生	昭57～
	須永 清	昭57～
老年心理学	野沢 栄司	昭57～平3
	横田 碧	昭57～昭59
	土屋 尚義	昭60
高齢化社会学	野尻 雅美	昭57～
	中島紀恵子	昭57～
生活環境論	平山 朝子	昭57～昭58
生活援助論	平山 朝子	昭59～
	山岸 春江	昭58～
食生活	落合 敏	昭57
老年期の栄養学	落合 敏	昭58
運動援助・食餌指導	落合 敏	昭58
老年期の病態栄養	小藤田和郎	昭59～昭60
老年期の食事援助	落合 敏	昭59～
老年期生きがい論	四宮 晟	昭57～昭58
	安香 宏	昭59～
老人疾病学	土屋 尚義	昭57～
	松岡 淳夫	昭57～平2
	石黒 義彦	平3
老人疾病看護学	金井 和子	昭57～
	野口美和子	昭57～昭60

科 目 名	講師名	担当年度
運動援助・ リハビリテーション 生活援助の人間工学 療養生活の援助 現地指導の方法と問題点	小島 操子	昭57
	佐藤 禮子	昭58～昭60
	佐々木 健	昭61～
	渡辺 誠介	昭57～平3
	宮腰由紀子	平1～
	小原 二郎	昭57～
	宮崎 和子	昭59～
	渡辺タツ子	昭61～
	大津 ミキ	昭57,59,60
	木村 宏子	昭57
	中尾 久子	昭58
	河瀬比佐子	昭58
	宮崎 和子	昭58
	大河原千鶴子	昭59～
	河合千恵子	昭59～
	土屋 尚義	昭62～
援助技術論（演習）		
援助技術論演習	土屋 尚義	昭57～
	金井 和子	昭57～
施設見学・特別講義		
千葉県リハビリテーションセンター	渋谷 禎子	昭57～平3
	佐々木 健	昭57～昭60
千葉市和陽園	渡辺タツ子	昭57～昭60
		平1～
	鳥羽田典子	昭61～昭63
東京都養育院附属病院	大山ヨシ子	昭57～昭59
芙蓉会上総園	小井土可祢子	昭58～
芙蓉会ミオファミリア	沢井美智子	平3～

研修看護管理分野科目講師名一覧

看護管理論（講義）

科目名	講師名	担当年度
管理学概論	松岡 淳夫	昭57～平2
医療管理論	岩崎 栄	平3～
管理学特講	永田 一郎	昭58
	村山 元英	昭58～
経営管理特講	村山 元英	昭59～昭60
経営管理論	村山 元英	昭61～
看護管理論概説	草刈 淳子	昭57
看護管理概論	草刈 淳子	昭59～
組織制度論Ⅰ	草刈 淳子	昭57～昭60
看護管理Ⅰ（組織制度論）	草刈 淳子	昭61～
組織制度論Ⅱ	荒井 蝶子	昭57～昭60
看護管理Ⅱ（組織運用論）	荒井 蝶子	昭61～
組織制度論Ⅲ	平山 朝子	昭58
看護管理Ⅲ （病院看護管理論）	吉武香代子	昭61～平2
看護管理Ⅳ（看護環境）	阪口 禎男	昭61～平3
病院管理論	松岡 淳夫	昭57～昭58
病院管理概説	松岡 淳夫	昭59～平2
病院管理における財務	一条 勝夫	昭58～
看護部における人事管理	森 とく	昭58
看護部における	森 とく	昭59～昭61
管理の問題点	鶴岡 藤子	昭62～平2
看護サービスの基本	間宮 貞	昭62～平1
	松岡 淳夫	平2
看護管理の実際Ⅰ	達子 房	平3～
看護管理の実際Ⅱ	鶴岡 藤子	平3～
看護総論	薄井 坦子	昭57
看護概論	薄井 坦子	昭58～昭61
対人関係とリーダーシップ	根本 橘夫	昭57
リーダーシップ人間関係論	根本 橘夫	昭58～昭59
	稲毛 教子	昭60～平3

科目名	講師名	担当年度
病院施設構造と動線	伊藤 誠	昭57
看護と施設・構造	伊藤 誠	昭58～
看護行為と人間工学 （概説）	安藤 正雄	昭57
看護行為と人間工学 （文献）	大串 靖子	昭57
看護行為と人間工学 （実験）	松岡 淳夫	昭57
看護技術と人間工学Ⅰ	安藤 正雄	昭58～平2
看護技術と人間工学Ⅱ	上野 義雪	昭58～平2
看護と人間工学	上野 義雪	平3～
看護技術の研究計画	松岡 淳夫	昭58～平2
看護情報管理	松岡 淳夫	昭57
看護情報論	松岡 淳夫	昭58～平2
看護情報管理と用語	野島 良子	昭57
情報管理とコンピューター	中野 正孝	昭57
看護情報とコンピューター	中野 正孝	昭58～
医療情報管理	里村 洋一	昭58～
母性看護管理論	阪口 禎男	昭57～昭60
小児看護管理論	吉武香代子	昭57～昭60
職場の健康管理	米満 道子	昭57～昭58
	木下 安弘	昭59～
看護管理論（演習）		
管理学演習	松岡 淳夫	昭58
組織・制度演習	草刈 淳子	昭58～
リーダーシップ演習	草刈 淳子	昭58
管理総合演習	松岡 淳夫	昭59～平2
情報管理演習	阪口 禎男	昭59～
看護と人間工学演習	阪口 禎男	昭59～

見学・実習

施 設 名	年 度
川崎製鉄千葉製鉄所	昭57～昭58
ロイヤル株式会社	昭58～平2
オリエンタルランド株式会社	平3～
千葉県がんセンター	昭57～昭61
日本大学医学部附属板橋病院	昭57～昭62
順天堂大学浦安病院	昭62, 平2～
北里大学医学部附属病院	昭63～平1
慈恵会医科大学柏病院	平1
千葉大学医学部附属病院	平2
松戸保健所	昭57～昭60
松戸市役所健康管理課	昭57～昭60
習志野保健所	昭57～昭60
習志野市役所健康管理課	昭57～昭60
浦安市役所	昭61～昭63
市川保健所	昭61～昭63, 平3
市川市役所	昭61～昭63, 平3
君津市役所	昭61～昭63
木更津保健所	昭61～昭63
茂原保健所	昭63～平3
茂原市役所	昭63～平3
鴨川保健所	平1～平2
長生村役場	平1
市原保健所	平2
市原市保健センター	平2
佐原保健所	平2～平3

施設別研修生一覧

所属	年度	昭和57年	昭和58年	昭和59年	昭和60年
北海道大学医学部附属病院		井 上 弘 子	石 垣 靖 子	岡田 きょう子	高 橋 みつ子
北海道大学歯学部附属病院					
弘前大学医学部附属病院			菊 池 寿美子		千 葉 由起子
東北大学医学部附属病院					
秋田大学医学部附属病院					
山形大学医学部附属病院		山 川 明 子			
千葉大学医学部附属病院		浜 野 孝 子			赤 井 ユキ子
東京大学医学部附属病院		加 藤 光 實			河 合 笑 子
東京医科歯科大学附属病院					
富山医科薬科大学附属病院			出来田 満 恵	山 口 千鶴子	境 美代子
信州大学医学部附属病院		太 田 君 枝			
三重大学医学部附属病院			奥 川 直 子		
滋賀医科大学医学部附属病院				坂 井 靖 子	
大阪大学歯学部附属病院				武 井 綾 野	
神戸大学医学部附属病院		友 藤 敬 子			
岡山大学医学部附属病院					
広島大学医学部附属病院					
山口大学医学部附属病院					
九州大学医学部附属病院					
九州大学生体防御医学研究所附属病院					片 野 純 子
佐賀医科大学医学部附属病院			山 口 渥 子		
長崎大学医学部附属病院		喜 多 泰 子		中 村 春 枝	
熊本大学医学部附属病院		白 石 テイ子			
大分医科大学医学部附属病院				永 楽 伊津子	渡 辺 美和子
宮崎医科大学医学部附属病院			中 城 妙 子		
鹿児島大学医学部附属病院		網 屋 タエ子			
鹿児島大学歯学部附属病院					
琉球大学医学部附属病院					
札幌医科大学医学部附属病院			久保沢 朱 美	飯 田 洋 子	前 田 良 子
横浜市立大学医学部附属病院					
名古屋市立大学医学部附属病院					
京都府立医科大学医学部附属病院					
独 協 医 科 大 学 病 院		板 橋 イク子			
順天堂大学医学部附属順天堂浦安病院					

昭和61年	昭和62年	昭和63年	平成 1 年	平成 2 年	平成 3 年
阿 部 三枝子	谷 口 満里子	宮 川 純 子		佐 竹 恵美子	
	坂 口 登 子				
	和 田 精 子	安 田 文 子			
熊 田 真紀子	一 條 靖 子		柏 倉 栄 子	宮 越 不二子	秋 山 典 子
		加賀谷 郁 子			
青 木 美智子	野 本 富士子	宮 田 智 子			莊 司 京 子
		松 谷 千 枝	石 館 美弥子	浅 田 妙 子	平 井 優 美
	松 田 公 夫	塚 原 節 子	横 内 美代子		
沢 谷 ゆき江	郷 津 世志恵	深 沢 佳代子	岩 城 直 子		辻 口 喜代隆
			西 原 三枝子		地 崎 真寿美
		巽 妙 子		立 村 武 子	
白 井 喜代子		部 谷 智恵美		高 橋 光 枝	米 森 淳 子
			田 中 好 枝		田 中 洋 子
伊 藤 洋 子		野 島 幸 子			金井田 文 恵
		関 初 子		高 宗 和 子	
	朝久野 洋 子	田 口 智香子		向 井 ふさ子	
	熊 副 マサ子		川 口 マ ス	中 村 ます子	出 水 玲 子
		坂 井 登志子		平 尾 静 江	
高 村 美智子	桜 井 繁 子	坂 林 博 子		佐 多 道 子	
佐 藤 貴美子	服 部 紀 子		中 武 桂 子		
森 山 比路美					
高 野 憲 子	鈴 村 初 子		種 池 礼 子		
津 田 征 枝					

所属	年度	昭和57年	昭和58年	昭和59年	昭和60年
昭和大学医学部附属病院					
昭和大学医学部附属豊洲病院					
帝京大学医学部附属病院					
帝京大学医学部附属市原病院					
東京医科大学医学部附属病院					
東京医科大学医学部八王子医療センター					
東京歯科大学歯学部千葉病院					
東京慈恵会医科大学医学部附属病院	田 中 キミ子				
東京慈恵会医科大学医学部附属青戸病院					
東京慈恵会医科大学医学部附属第三病院					
東京慈恵会医科大学医学部附属柏病院					
東京女子医科大学医学部附属第二病院					
東邦大学医学部附属大橋病院					渡会丹 和 子
日本医科大学医学部付属病院	田 口 吉 子	横 村 栄 子	嶋 崎 千 壽	須 藤 裕 子	
日本医科大学医学部付属第二病院					
日本医科大学医学部付属多摩氷山病院					
近畿大学医学部附属病院					
計		12	8	8	10

昭和61年	昭和62年	昭和63年	平成 1 年	平成 2 年	平成 3 年
大 水 美名子	青 木 利津子	小久保 市 津 杉 浦 亮 子	組 谷 薫 高草木 伸 子	水 澤 典 子 村 山 敦 子	寺 地 順 子 平良木 町 子 森 川 昭 美 許 斐 玲 子 大 谷 玉 子
三 上 ちづ子	徳 本 弘 子	井 上 ふさえ 太 田 久 子 對 馬 みつ子 岡 野 節 子	柏 谷 由美子 梅 田 嘉 子 角 谷 英 子 浅 里 いさお	菱 田 清 子 藤 井 秀 子 高 宮 テ ル	鈴木 和 子
13	14	20	15	15	15

3. 文部省委託国公私立大学病院看護管理者講習会

国公私立大学病院看護管理者講習会

昭和57年、千葉大学看護学部看護実践研究指導センターが設立されたことを契機に、それまで東京大学医学部構内の一角でなされていた本講習会は、千葉大学に委託され看護学部が担当・運営し今日に至っている。

本講習会は、昭和35年、全国的規模で病院ストが起こり、看護管理の重要性が認識され、総婦長を中心とする看護組織の強化を図る必要性から開始されたものである。

対象は原則として1大学1名の約70名、期間は約10日間（総時間48時間）である。

講習会の目的は、大学病院の特殊性に鑑み、「医学教育機関としての機能を十分に発揮させるため、看護婦長等看護管理者に対し看護管理上必要な知識を習得させ、その資質の向上を図り、もって大学病院における看護機能の効用に資する」こととされている。

看護管理のレベルのうち、主として看護婦長を対象としてカリキュラムが構成され、看護管理をコアとして運営されている。医療／病院管理学（財務、法律も含む）及び看護行政から、医療と看護の動向とその問題を把握し、その中での看護のあるべき方向性とその役割を明確にする。さらに関連科目として、職場の人間関係、看護基礎教育、地域看護について学ぶことにより、施設内看護が効率的に管理運営されるための広い視野をもつよう企画されている。昭和62年に今後の大学病院における医療のあり方が問われたことを契機に、「大学病院をめぐる最近の状況」について文部省担当官から基調講演がなされている。

コアとなる看護管理は、「看護管理総論ⅠⅡⅢ」で看護管理総論、病院看護管理論、継続教育論を、「看護管理の実践ⅠⅡⅢ」では病院看護部長から管理の実践問題が具体的に提示され、さらに「看護管理と研究」を加え、セミナーのグループ討議を通して、ものの見方考え方を訓練し、問題解決への方法を探ることとしている。

セミナーは、当初、「看護体制の見直し」等6～8の課題を示して、各自「希望するグループで検討してきたが、昭和61年度より、大学病院における看護のあり方を具体的に検討するため、統一テーマ「拡大する看護業務の見直しとそれへの対応」とした。さらに平成元年度からは「大学病院における看護のあり方」という大きな統一テーマの下で、内科系・外科系病棟、中央診療部門、外来等の各グループでそれぞれ関心のある問題について討議してきた。

グループ討議の助言者には、学部教官の他、大学病院副看護部長及び昭和58年度以降は本講習会修了者からの参加も得ている。最終日の全体討議では、各グループの発表について助言者のコメントを受け、共通の理解としている。修了生はこの10年間で別紙のとおり733名を数え、副看護部長や他病院の総婦長となった者もいる。短期のため、十分浸透するまでには至らないが、現場の活性化に役立つとの声も多い。

（草刈淳子）

科目および時間数

科 目	時 間 数
1.	
〔看護管理〕	(34.5)
看護管理総論Ⅰ	3.0
看護管理総論Ⅱ	3.0
看護管理総論Ⅲ	3.0
看護管理の実際Ⅰ（講義）	1.5
看護管理の実際Ⅱ（セミナー）	1.5
看護管理の実際Ⅱ（講義）	1.5
看護管理の実際Ⅱ（セミナー）	1.5
看護管理の実際Ⅲ（講義）	1.5
看護管理の実際Ⅲ（セミナー）	1.5
看護管理と看護研究	1.5
看護管理セミナー	15.0
2.	
〔病院管理〕	(6.0)
病院管理学Ⅰ	3.0
病院管理学Ⅱ	3.0
3.	
〔看護管理関連科目〕	(7.5)
看護基礎教育課程の動向（臨床実習指導を含む）	1.5
地域における看護活動	1.5
職場における人間関係	3.0
看護行政の現状と展望	1.5
計	48.0

国公立大学病院看護管理者講習会講師一覧

科目	年度	昭和57年	昭和58年	昭和59年	昭和60年
医療の動向と大学病院 大学病院の最近の状況 医療・病院管理Ⅰ (院内感染について)			石原伸吾		
医療・病院管理Ⅱ 看護管理上の問題提起 看護管理総論Ⅰ	三宅史郎	三宅史郎	石原伸吾	石原伸吾	
Ⅱ	一条勝夫	倉田正	倉田正一	黒田幸男	
Ⅲ	草刈・鶴沢・金井				
看護管理の実際Ⅰ	草刈淳子	草刈淳子	草刈淳子	草刈淳子	
Ⅱ	吉武香代子	吉武香代子	吉武香代子	吉武香代子	
Ⅲ			鶴沢陽子	鶴沢陽子	
看護管理と臨床実習指導	内田卿子	内田卿子	内田卿子	内田卿子	
看護管理と研究	高橋美智	高橋美智	高橋美智	高橋美智	
看護管理の現状	島崎佐智子	島崎佐智子	島崎佐智子	島崎佐智子	
＜特別講義＞	金井和子	金井和子	金井和子		
看護の本質と看護教育 看護基礎教育課程の動向 看護行政の現状と展望 職場における人間関係 地域における看護活動 ＜看護セミナー＞	森とく	森とく	森とく	金井和子	
全体討議助言者		薄井担子			
	清水嘉代子	清水嘉代子	杉森みど里	杉森みど里	
	平山朝子	平山朝子	清水嘉代子	矢野正子	
			横田碧	横田碧	
	吉武香代子	吉武香代子	平山朝子	平山朝子	
	薄井担子	前原澄子			
	松岡淳夫	松岡淳夫	吉武香代子	吉武香代子	
	鶴沢陽子		松岡淳夫	松岡淳夫	
	金井和子				
全体討議司会進行 グループ討議助言者	草刈淳子	草刈淳子	草刈淳子	草刈淳子	
	田口ヨウ子	齊藤扶美子	北村よし乃	鶴岡藤子	
	野口美和子	桜井美鈴	小島恭子	中島由美子	
	杉森みど里	野口美和子	田口ヨウ子	野口美和子	
	鶴沢陽子	横田碧	横田碧	横田碧	
	金井和子	佐藤禮子	佐藤禮子	鈴木節子	
		石井トク	杉森みど里	杉森みど里	
		鶴沢陽子	鶴沢陽子	鶴沢陽子	
		金井和子	金井和子	金井和子	
		花島具子	花島具子	花島具子	
		吉田伸子	吉田伸子	吉田伸子	

昭和61年	昭和62年	昭和63年	平成元年	平成2年	平成3年
		文部省課長補佐 (兼病院指導専門官) 金 森 越 哉	大学病院指導室長	大学病院指導室長	大学病院指導室長
岩 崎 栄	岩 崎 栄	岩 崎 栄	嶋 野 英 彦	嶋 野 英 彦	杉 浦 哲 郎
黒 田 幸 男	黒 田 幸 男	一 条 勝 夫	岩 崎 栄	大 道 久	大 道 久
					小 林 寛 伊
草 刈 淳 子	草 刈 淳 子	草 刈 淳 子	一 条 勝 夫	平 林 勝 政	平 林 勝 政
吉 武 香代子	吉 武 香代子	吉 武 香代子	草 刈 淳 子	草 刈 淳 子	草 刈 淳 子
鶴 沢 陽 子	鶴 沢 陽 子	鶴 沢 陽 子	吉 武 香代子	吉 武 香代子	高 橋 美 智
内 田 卿 子	内 田 卿 子	内 田 卿 子	鶴 沢 陽 子	鶴 沢 陽 子	鶴 沢 陽 子
高 橋 美 智	平 川 美 代	平 川 美 代	内 田 卿 子	内 田 卿 子	内 田 卿 子
島 崎 佐智子	間 宮 貞	間 宮 貞	小 島 通 代	小 島 通 代	茂 木 嫡 子
			間 宮 貞	三 浦 規	三 浦 規
金 井 和 子	金 井 和 子	金 井 和 子	金 井 和 子	金 井 和 子	金 井 和 子
杉 森 みど里	杉 森 みど里	杉 森 みど里	杉 森 みど里	杉 森 みど里	高 橋 みや子
矢 野 正 子	矢 野 正 子	矢 野 正 子	矢 野 正 子	矢 野 正 子	矢 野 正 子
稲 毛 教 子	稲 毛 教 子	横 田 碧 子	横 田 碧 子	横 田 碧 子	横 田 碧 子
平 山 朝 子	平 山 朝 子	平 山 朝 子	平 山 朝 子	平 山 朝 子	平 山 朝 子
吉 武 香代子	高 橋 美 智	平 川 美 代	小 島 通 代	小 島 通 代	高 橋 美 智
松 岡 淳 夫	松 岡 淳 夫	松 岡 淳 夫	松 岡 淳 夫	大 室 律 子	大 室 律 子
				松 岡 淳 夫	
草 刈 淳 子	草 刈 淳 子	草 刈 淳 子	草 刈 淳 子	草 刈 淳 子	草 刈 淳 子
北 村 よし乃	齊 藤 扶美子	大 塚 清 子	北 村 よし乃	齊 藤 扶美子	大 塚 清 子
鈴 木 節 子	中 村 礼 子	沼 尻 光 恵	北 山 春 代	嶋 崎 千 壽	青 木 利 律
菊 一 好 子	一 木 順 子	田 中 千代子	赤 沢 陽 子	小 池 順 子	磯 岩 寿 満
杉 森 みど里	佐 藤 禮 子	石 井 ト ク	野 口 美 和	佐 藤 禮 子	兼 松 百 合
鶴 沢 陽 子	鶴 沢 陽 子	鶴 沢 陽 子	鶴 沢 陽 子	鶴 沢 陽 子	鶴 沢 陽 子
金 井 和 子	金 井 和 子	金 井 和 子	金 井 和 子	金 井 和 子	金 井 和 子
花 島 具 子	花 島 具 子	花 島 具 子	花 島 具 子	花 島 具 子	花 島 具 子
吉 田 伸 子	吉 田 伸 子	吉 田 伸 子	吉 田 伸 子	吉 田 伸 子	吉 田 伸 子

国公立大学病院看護管理者講習会受講者一覧表

○国立大学

大学名	年度	昭和57年	昭和58年	昭和59年	昭和60年
北海道大学		中村照子	遠藤英子	工藤喜恵子	加藤緑
旭川医科大学		高橋 糸子	坂東豊子	澤沼敏子	山田久美子
弘前大学		安部 洋子	村上知子	須藤明子	大橋くみ子
東北大学		武井操子	赤塚礼子	蜂谷ミエ	鈴森とし子
秋田大学		塩野サダ	戸部セイ	石郷岡和子	佐々木寿真
山形大学		佐藤智枝	細川房子	鎌上弘子	棚井綾子
筑波大学		畑山述子	渡辺清子	福山なおみ	平山幸子
群馬大学		増田政子	石原ノブ子	中村美代子	木暮総子
千葉大学		宇野沢君子	江口万里	竹山富美子	田村道子
東京大学		玉木光子	浅井皓子	野口敏子	木内常知代
			寺田建子		
			服部萬里子		
東京医科歯科大学		太田盛子	小島愛子	落海真喜枝	関 恭子
			林喜久子		
新潟大学		貝沼ハルエ	木村ミチ	栗山君枝	遠藤貞子
富山医科大学		江川アツ子	吉田百合子	境 美代子	吉国貞子
金沢大学		池岡八重子	小梁芳子	大友節子	前田恵美子
福井医科大学				奥村直江	大口二美
山梨医科大学			中村洋子	三木早苗	東和美
信州大学		根本三代子	土屋久美子	伊藤和子	堀 美代子
岐阜大学		中川訓江	國枝純子	廣瀬慶子	藤井泰江
浜松医科大学		雲井美代子	望月茂代	石山とくゑ	船本博子
名古屋大学		玉川孝子	三井喜代	近藤文子	山本友子
三重大学		近沢八千代	鶴飼カヨ	福本はる代	奥川喜久子
滋賀医科大学		黒政一江	笹山恭子	久保木薫恵	徳川早知子
京都大学		森井静枝	坂東喜久子	西森三保子	衣笠静緒
大阪大学		豊田ミユキ	布引喜見江	清水良子	藤岡ミネ
神戸大学		田中寿美子	中岩孝子	中井美千子	西野 薫
鳥取大学		菱谷依子	林原愛子	和田範子	山本規子
島根医科大学		板倉順子	島田照子	小池節子	安部富美子
岡山大学		内田千鶴子	松井優美子	奥山信子	橋本誠子
広島大学		武島浩江	才野原照子	亀田昭子	寺岡幸子
山口大学		正木光代	田代松子	舩本範子	藤原淳子
徳島大学		国方明子	加藤香代子	沖成雅子	田中富栄

昭和61年	昭和62年	昭和63年	平成元年	平成2年	平成3年
林 節 子	宮 村 素 子	柿 沼 正 代	伊 藤 美智子	平 山 妙 子	虎 谷 比佐美
高 橋 陽 子	三 浦 壽 子	久保田 芳 江	田 中 京 子	大 槻 伸 子	竹 脇 恵 子
工 藤 睦 子	幸 坂 はま子	佐 藤 貴 恵	花 田 ヤス子	木 村 妙 子	成 田 敏 子
斎 藤 カツ子	吉 田 千恵子	安 達 節 子	南 條 妙 子	阿 部 陽 子	瀧 島 美 紀
佐 藤 昌 平	児 玉 芳 子	小 西 亨 子	登利谷 ミ ッ	明 沢 京 子	田 口 恵 子
長 岡 栄 子	田 代 久 男	菊 地 たけえ	川 村 良 子	中 野 榮 子	濱 口 菊 枝
佐 藤 典 子	新 井 香代子	相 川 三保子	西 田 志保里	佐々木 俊 子	山 元 照 美
小 林 秀 代	内 山 康 子	古 川 陽 子	遠 田 妙	佐 藤 一 枝	小野関 仁 子
勅使川原 ちか	村 山 タ ケ	橋之口 文 子	笹 本 喜美江	櫻 井 葉 子	叶 井 優 子
江 水 俊 子	佐 藤 繁 枝	丸 山 静 枝	影 山 初 子	山 下 多香子	丸 尾 恭 子
百 瀬 章 子	千 葉 トシ子	荻 原 寿美子	森 洋 子	小 笹 和 子	石 井 和 代
小 山 静 枝	松 尾 日比子	小 林 ひ ろ	佐々木 サイ子	南 波 奈都子	吉 井 英 子
高 橋 登志子	室 谷 恵美子	浜 祐 美	五十嵐 藤 子	島 田 鞆 子	板 倉 俊 子
江 川 節 子	竹 内 一 枝	伊 藤 安 子	前 野 つ ね	毛 利 駒 江	和田出 静 子
松 田 喜久子	山 下 勝 代	五十嵐 久美子	稲 田 悦 子	斉 藤 好 子	屋 敷 ひめお
三 枝 純 子	岩 下 直 美	有 田 明 美	高 野 和 美	秋 山 栄	古 屋 紀代美
茂 野 テル子	下 井 春 枝	上 條 恵美子	丸 山 ひさみ	日比野 和 子	矢野口 宏 子
橋 場 憲 子	間 宮 礼 子	鈴 木 迪 子	松 宮 良 子	三 浦 公 子	戸 田 由紀子
谷 口 紀 子	木 又 しづ江	飯 田 芳 子	金 指 マチヨ	今 野 正 子	松 下 恵 美
百 石 登美子	大 原 洋 子	足 立 きぬゑ	加 藤 順 子	久 米 美 登	山 口 政 江
水 谷 良 子	廣 岡 和 子	東 一 子	藤 村 伊津子	脇 田 トミコ	北 山 悦 子
櫻 井 律 子	森 山 恵 子	三 島 幸 子	布 施 耀 子	松 本 恵 子	藤 井 ふさ子
今 井 奈都子	加 藤 薫	熊 谷 靖 子	近 藤 諭	浜 辺 公 子	山 本 喜 美
富 岡 敦 子	杉 原 勝 子	安 藤 邦 子	柳 生 啓 子	相 蘭 紀代子	里 村 節 子
車 田 桂 子	宮 脇 笙 子	山 口 保 子	高 瀬 孝 子		東 田 ミツエ
足 羽 美恵子		池 田 侑 子	畠 山 清 子	山 崎 昭 子	
	吉 岡 みち子	山 本 芳 枝	八 国 秀 子	藤 田 真 美	稲 垣 文 子
稲 牆 喜久子	松 田 尚 子	阿 部 綾 子	片 山 徳 子	吉 田 妙 子	河 野 幸 枝
木 村 規美子	福 田 ムツ子	原 田 博 子	磯 部 和 美	中 尾 典 子	向 井 慶 子
西 嶋 敬 子	満 田 幸 枝	頼 本 智 子	有 田 信 子	宗 内 由紀子	田 村 圭 子
松 村 早 智	富 永 禮 子	三 石 文 恵	長 山 稲 子	和 田 愛 子	辻 喜美子

大学名	年度	昭和57年	昭和58年	昭和59年	昭和60年
香 川 医 科 大 学				松 原 幸 子	安 田 壽 賀 子
愛 媛 大 学		廣 田 玲 子	木 村 幸 子	大 坪 敬 子	小 松 洋 子
高 知 医 科 大 学		丹 生 恭 子	西 村 仁 美	藤 丸 香 代 子	畑 山 み どり
九 州 大 学		小 北 良 子	谷 真 佐 子	山 本 悦 子	吉 村 八 千 代
佐 賀 医 科 大 学		吉 武 恵 美 子	山 崎 美 代 子	安 永 敏 子	酒 見 敬 子
長 崎 大 学		大 田 絹 枝	金 沢 和 子	内 矢 洋 子	田 中 愛 子
熊 本 大 学		福 山 公 子	江 口 治 子	城 慶 子	高 宗 和 子
大 分 医 科 大 学		松 永 節 子	渡 邊 美 和 子	中 西 美 也 子	田 川 セ ッ 子
宮 崎 医 科 大 学		安 楽 京 子			
鹿 児 島 大 学		西 久 保 レ イ 子	山 崎 京 子	大 隣 ア ャ 子	今 井 洋 子
琉 球 大 学		比 嘉 照 子	中 村 ス ミ 子	新 垣 ナ エ	
(国 立 大 学)		39名	42名	41名	40名

○公立大学

大学名	年度	昭和57年	昭和58年	昭和59年	昭和60年
札 幌 医 科 大 学		梶 谷 彌 栄 子		岡 部 美 佐 子	片 岡 秋 子
福 島 県 立 医 科 大 学			鈴 木 フ ミ	二 瓶 ア イ	山 本 み つ 子
横 浜 市 立 大 学		堀 坂 ク ラ 子	笹 浪 千 鶴 子	本 間 順	沼 尻 光 恵
名 古 屋 市 立 大 学		西 野 美 智 子	岩 戸 瞳	犬 塚 勝 子	友 松 諄 子
京 都 府 立 医 科 大 学		時 松 昌 子	大 橋 純 子	生 原 蓉 子	中 野 誠 子
大 阪 市 立 大 学		小 澤 キ ヨ 子	山 根 悦 子	金 森 房 子	高 木 一 子
奈 良 県 立 医 科 大 学		植 林 み どり	田 中 純 江	木 村 和 子	宮 本 篤 子
和 歌 山 県 立 医 科 大 学					
(公 立 大 学)		6 名	6 名	7 名	7 名

○私立大学

大学名	年度	昭和57年	昭和58年	昭和59年	昭和60年
岩 手 医 科 大 学		武 藤 ト キ 子	五 日 市 よ う	多 田 公 子	藤 澤 範
自 治 医 科 大 学			鈴 木 良 江	薬 真 寺 美 佐 子	青 木 利 志 恵
獨 協 医 科 大 学		宮 本 郁 枝	田 島 日 佐		佐 藤 澄 子
埼 玉 医 科 大 学		塩 谷 昌 子	松 田 千 浪	吉 田 た け	根 本 多 美 子
北 里 大 学		小 島 恭 子		菊 一 好 子	
杏 林 大 学		玉 手 恵 子	平 岡 慶 子	菊 竹 志 津 子	植 田 寿 美 子
慶 應 義 塾 大 学			三 浦 英 子		北 山 春 代
順 天 堂 大 学		桜 井 美 鈴	阿 蘇 和 子		
昭 和 大 学		西 村 く さ の	藤 森 紀 江	市 川 幾 恵	柴 田 良 子
帝 京 大 学			松 橋 ヒ デ 子	新 井 藤 江	當 間 美 代 子

昭和61年	昭和62年	昭和63年	平成元年	平成2年	平成3年
阪井 眞利子 三瀬 直子 麻植 美佐子 杉村 雅子 松尾 幸子 中村 タツコ 緒方 満子 一法師 博美 川添 久子 喜納 時子	長井 昭子 三並 豊美 岡林 安代 加藤 愛子 池上 宣子 野口 洋子 渡辺 禎子 柚野 京子 小山 由美子 下地 武子	山上 富代 和田 カズ子 藤川 加米子 藤島 ミチエ 大久保 薫 田口 寿子 西野 チナミ 西山 淑子 井上 八千代 神前 喜代子 奥間 美津子	森本 加代子 奥村 純子 倉岡 純子 古賀 ミヨ子 岡 聿子 松武 滋子 猿渡 和子 松山 明美 中武 章子 寿福 美智子 平良 和子	西原 朝子 中野 静子 川村 美奈子 古川 弘子 吉原 久美子 堀田 初江 中村 十志子 氷山 はつみ 宮原 朋子 取附 光徳 山口 幸子	国方 弘子 高市 郷子 若狭 郁子 内堀 欣子 樋渡 泉 吉田 稔子 中村 久美子 赤嶺 信子 中島 多海子 新福 優子 識名 通子
40名	40名	42名	42名	41名	41名

昭和61年	昭和62年	昭和63年	平成元年	平成2年	平成3年
栗和田 美恵 深田 富子 脇田 恵美子 泉本 亘子 原田 睦子	朽木 恵子 福田 玲子 水沢 公子 田渕 タカ子 小東 美幸 倉橋 恵美子 植村 信子	中西 栄美子 長沢 アサ子 山口 美代子 荒川 菅子 田中 八千栄 松尾 美代子 池田 映子	 山口 松枝 岩田 広子 湯浅 アサ子 川島 美弥子 谷本 美津江	今野 雅子 佐藤 延子 山田 瑠美子 丹羽 順子 中舎 篤子 米田 眞智子 藤村 弘子 岩田 資子	田中 鈴子 横山 幸子 渡邊 壽子 湯原 恵子 國行 富美子 吉長 三樹子
5名	7名	7名	5名	8名	6名

昭和61年	昭和62年	昭和63年	平成元年	平成2年	平成3年
石堂 洋子 橋本 明美 野口 久美子 山崎 和子 古山 智也子 皆川 恵子 中村 郁子 知々田 イク子	槌田 シゲ子 越後 芳子 田崎 ノリ子 小田部 祐恵 藤田 幸子 石塚 和江 川口 弘子 喜多 笑美子 大音 清香 平良木 町子	福嶋 安子 中島 和子 荻原 サイ子 川尻 スズエ 及川 久良子 崎山 恵子 山下 節	篠原 和子 関口 良子 林 和子 磯山 ふさ 石井 孝子 真野 映子 三浦 徳子 佐藤 和子	大川 美代子 飯島 栄子 斉藤 栄子 石田 千鶴 橋本 おさむ 斉藤 百合子 穴沢 テル子 森 晶子 土屋 康子	渡辺 芳江 齊藤 啓子 近江谷 キヌ子 嶋野 ひさ子 大釜 和江 粕谷 久美子 本田 美季恵

大学名	年度	昭和57年	昭和58年	昭和59年	昭和60年
東 海 大 学		松 本 恭 子			斎 藤 拾 子
東 京 医 科 大 学		阿 部 満 子	湯 原 節 子 三 輪 和 枝	中 野 早 苗	川 上 艶 子
東 京 慈 恵 会 医 科 大 学		千 葉 幹 子	高 橋 園 江	鈴 木 麗 子	立 崎 洋 子
東 京 女 子 医 科 大 学			中 島 由美子	伊 東 昌	石 井 一 枝
東 邦 大 学		久木園 千 尋	梅 田 嘉 子 武 田 光 代	井 上 ふさえ	平 沢 永 子
日 本 大 学		小笠原 武 子	一 木 順 子	藤 井 静 枝	弘 中 泰 子
日 本 医 科 大 学		伊 藤 英 子	関 口 百合子 高 倉 宏 子	宇賀村 眞紀子	岡 野 節 子
聖 マ リ ア ナ 医 科 大 学		飯 塚 集 子	佐 伯 陽 子	利根川 静 子	山 内 幸 子
金 沢 医 科 大 学		杉 本 定 子	米 沢 暫 子	佐 野 順 子	高 山 静 子
愛 知 医 科 大 学		鈴 木 春 子	西 川 貞 子	豊 田 弘 子	谷 口 昌 子
藤 田 保 健 衛 生 大 学					金 岡 哲 二
大 阪 医 科 大 学		菊 岡 めぐみ	崎 山 三 代	井 原 美保子	
関 西 医 科 大 学		阪 口 喜久子	小野村 容 子	清 水 千江子	橋 口 富 枝
近 畿 大 学		三 宅 弥 生	大 西 幸 子	陸 田 由 美	
兵 庫 医 科 大 学		春 江 ハル子	木 田 玲 子	田 窪 文 子	河 田 次 子
川 崎 医 科 大 学			清 田 玲 子		大 森 智恵子
久 留 米 大 学		江 島 久美子		空 閑 ナツ子	山 本 富士江
産 業 医 科 大 学		永 留 てる子	小 島 富 代	坂 本 久 代	豊 澤 英 子
福 岡 大 学				稲 戸 みゆき	野 田 久美子
東 京 歯 科 大 学			矢 吹 佐久子	湊 久 代	中 井 しげ子
日 本 歯 科 大 学					
城 西 歯 科 大 学			松 田 初 枝		平 林 孝 子
松 本 歯 科 大 学					
岐 阜 歯 科 大 学			松 野 かほる		
朝 日 大 学					
愛 知 学 院 大 学			中 田 さつ子	杉 山 八重子	
(私 立 大 学)		22名	31名	25名	27名
合 計		67名	79名	73名	74名

昭和61年	昭和62年	昭和63年	平成元年	平成2年	平成3年
酒 寄 マ サ	牛 木 道 子	千 葉 としえ	大 塚 久		佐 藤 光 子 佐 藤 り ゑ
田 中 千代子 鎌 倉 里 美 前 田 正 子	後 藤 美佐子 木 村 しづ江 福 嶋 勲 子	中 澤 素 子 肥 田 珠 美 田 村 立 子	慶田城 順 子 高 原 静 子	小 路 美喜子 大 澤 千賀子 菊 地 武 子	鹿 熊 洋 子 菊 地 京 子
手 塚 キ ミ 関 紀枝子	関 矢 則 子 佐 藤 恵 子	安 川 睦 子 小河原 美代子	椎 名 ひろみ 緑 川 誠 子	上 島 恵 子 福 島 イツ子	片 山 紀 子 田 辺 仁 美
陣 田 泰 子 当 波 和 美 三 輪 笑 子	長谷川 綾 子 横 畑 房 枝 秋 田 真佐代	宮 城 領 子 中 村 風 子 松 橋 かおる	森 田 孝 子 浜 本 千穂子 水 野 サヨ子	北 條 眞理江 矢 田 厚 子 三 浦 洋 子	後 藤 栄 子 北 村 時 子 浅 井 了 子
神 谷 美佐子 吉 積 町 子 城 戸 タカ子 木落卯 女 子 喜 田 玲 子 内 藤 妙 香 井 上 加寿代	富 成 よし子 清 竹 小夜子 足 立 志保子 瀬 戸 和 子 梅 森 潤 子 寺 本 和 子 平 直 子 瀬戸口 美智子 小 口 育 子 高 田 秀 子	岡 崎 和 子 乙 部 昌 子 内 海 孝 子 林 田 みさ子 岡 本 恂 子 金 子 美恵子 石 原 敏 子 谷 泰 子 石 下 三和子	小 林 千恵子 原 澄 子 小瀬利 章 子 千 田 美智子 小 塩 博 子 長谷川 紀 子 窪 田 恵 子 浅 倉 恵 子	中 西 ツギ子 内 田 静 子 根 岸 房 子 西 村 美枝子 須 田 厚 子 佐 藤 和 美 河 原 照 子 新 田 尚 子 本 柳 三智子	服 部 誠 子 浅 井 鈴 子 山 田 景 子 川 上 京 子 野 田 敦 子 野 田 ムツミ 市 丸 桃 江 益 子 和 江 杣 木 道 子
西 村 栄			一 木 照 子	友 松 好	
25名	29名	25名	25名	27名	25名
70名	76名	74名	72名	76名	72名

4. 文部省委託看護婦学校看護教員講習会

看護婦学校看護教員講習会

本講習会の千葉大学での実施は、看護学部附属看護実践研究指導センター所属教官の教育学部併任の終了した昭和60年からであり、他の事業と異なり現在7年目の途上である。

講習会の目的は「看護教員として必要な基礎的知識及び技術を習得させ、もって、看護教育の内容の充実向上を図ることを目的とする。」であり、7年間の変更のなかったのは講習会の名称とこの目的のみである。

応募資格は文部大臣指定の看護婦学校で看護教育に従事するもの、看護婦として3年以上の経験又はこれと同等以上の能力を有し、看護教育担当者（予定者を含む）として教育指導にあたり今後も継続意志のある者、原則的な年齢制限（35才）の3項目である。このうち、平成2年より看護婦としての経験年数が指定規則等の改正に伴い5年に変更された。

講義科目及び時間数は後掲の表に示す通り、一般教育科目、看護教育科目、看護研究から成り、時間数は510時間から、平成3年より705時間と大幅な延長となった。しかし、カリキュラムの基本構成は変わらず科目選択の導入で学習のゆとりと自主性を期待している。受講定員は6年間の応募状況と時間数の変更を勘案し平成3年より50名から40名に変更された。修了にあたっては看護学教育方法演習、看護研究のまとめと出席状況等より修了証書が授与されている。

以上の規定に従ってこの間参加した受講生は266名。所属は国立120名、公立34名、私立112名。このうち教員は77名（専修学校32名、短期大学25名、高等学校専攻科20名）28.9%で、189名は病院看護婦である。前者の過半は私立（42名）関係者で後者は国立（103名）が過半を占めている。年度別の平均年齢は32.4才（平成3年度）が最高で他の事業の参加者に比し最も若く、教育背景は看護教育制度を反映して多様である。

講師は毎年延べ25～28名、平成3年度には延べ43名と受講生数を上回る数となっている。うち千葉大学の教育学部、看護学部、センター、医学部、文学部、法経学部、教養部等の学内講師が70～90%を占め、学外講師には学習院大学、聖路加、日赤の各看護大学をはじめ、短期大学等の教員など多数の協力をいただいている。

受講生の受講後の感想の詳細はセンター年報の別冊にゆずるが、受講後の学習・教育活動をみると（平成2年2月調査）、回答のあった180名中病院から学校へ21名（専修学校13、短大8）、その他講義、臨床実習指導の担当は過半を越え、継続教育担当者も多い。学習の継続については院内・外での学習をはじめ、大学在学42名、看護研究の継続も124名と多く、受講生にとっては以後の学習・教育・研究活動の契機となっていることは疑いえない。

本講習会は保助看法制定に伴う戦後看護教育の担い手の育成のために昭和23年から実施された文部・厚生両省共催の3ヶ月コースを起源として今日におよんでいる。この間の社会の激しい変転にもかかわらずその形態を変えることなく今日まで継続しえたのは、受講生の高い学習意欲、時代、時代の教育学、看護学を時の最高指導者によって授与されてきたという内実の充実に支えられてきたものと考えられる。

（鶴沢陽子）

看護婦学校看護教員講習会の科目及び時間数

昭和60年～平成2年

講義科目	時間数
教育原理	30
教育方法	30
教育心理学	15
	15
教育評価	30
看護教育制度	15
看護論	15
看護学校教育課程	講15 演30
看護学教育方法看護学総論	講15 演30
看護学教育方法成人看護学	講15 演30
看護学教育方法成人看護学	講15 演30
看護学教育方法小児看護学	講15 演30
看護学教育方法母性看護学	講15 30
看護研究	90
臨床実習指導	15
レクリエーション指導*	6*
特別講義施設見学等	24
計	510

*平成元年度まで

平成3年～

講義科目	時間数
教育原理	30
教育方法	30
教育心理学	30
教育評価	30

生命倫理	15
総合科目	15
看護理論	30 (講・演)
看護学教育論 看護教育制度 看護学校教育課程	30
看護教育方法(5科目選択)	75
基礎看護学	15
成人看護学	15
老人看護学	15
小児看護学	15
母性看護学	15
精神看護学	15
地域看護学	15
看護学教育方法演習(1科目選択)	120
基礎看護学	120
成人看護学	120
老人看護学	120
小児看護学	120
母性看護学	120
精神看護学	120
地域看護学	120
看護研究概論	30
看護研究	90
選択科目(3科目選択)	45
看護学校管理	15
臨地実習指導方法	15
看護管理	15
家族社会学	15
特別講義	15
看護セミナー	30
特別演習	60
見学・その他	30
計	705

看護婦学校看護教員講習会講師一覧

授 業 科 目	講 師	年 度
教 育 原 理	岩垣 撰	昭60～
教 育 方 法	宇佐美 寛	昭60～
教 育 心 理	三浦 香苗	昭60～昭62
	根本 橘夫	昭60
	早坂 伸子	昭61
	宮下 一博	昭62
	坂上 佑子	昭63
	大野 桂	昭63
	下羽美枝子	昭62～
	金子智栄子	昭62～
教 育 評 価	鈴木 敦省	昭60～平 3
生 命 倫 理	加藤 尚武	平 3 ～
	飯田 亘之	平 3 ～
総 合 科 目	青木 孝悦	平 3 ～
	宮野 壽夫	平 3 ～
	江草 浩幸	平 3 ～
看 護 論	樋口 康子	昭60～平 1
	薄井 坦子	平 2
看 護 理 論	薄井 坦子	平 3 ～
	兼松百合子	平 3 ～
	小野寺杜紀	平 3 ～
	根本多喜子	平 3 ～
	舟島なおみ	平 3 ～
看 護 教 育 制 度	小林富美栄	昭60～昭62
	杉森みど里	昭63
	高橋みや子	平 1 ～
看 護 学 校	近藤 潤子	昭60～昭61
教 育 課 程	金井 和子	昭62～平 2
	高橋みや子	平 3 ～
同 演 習	近藤 潤子	昭60～昭61
	金井 和子	昭62～平 2
	吉田 伸子	昭62～平 2
	花島 具子	昭62～平 2
	鶴沢 陽子	昭62

授 業 科 目	講 師	年 度
看 護 学 教 育 方 法		
基 礎 看 護 学	高木 永子	昭60～平 1
	薄井 坦子	平 2 ～
	嘉手苺英子	平 2 ～
成 人 看 護 学	小島 操子	昭60
	岩井 郁子	昭60
	金井 和子	昭60～昭62
	鶴沢 陽子	昭61～昭62
	野口美和子	昭63～
	佐藤 禮子	昭63～
老 人 看 護 学	野口美和子	平 3 ～
	金井 和子	平 3 ～
小 児 看 護 学	森 まさ子	昭60
	吉武香代子	昭61
	兼松百合子	昭61～
母 性 看 護 学	前原 澄子	昭60～
	石井 トク	昭60～
精 神 看 護 学	横田 碧	平 3 ～
地 域 看 護 学	平山 朝子	平 3 ～
	山岸 春江	平 3 ～
同 演 習		
基 礎 看 護 学	高木 永子	昭60～平 1
	薄井 坦子	平 2 ～
	嘉手苺英子	平 2 ～
成 人 看 護 学	小島 操子	昭60
	岩井 郁子	昭60
	佐藤 禮子	昭60
	金井 和子	昭61～昭62
	吉田 伸子	昭61～平 2
	鶴沢 陽子	昭61～昭63
	花島 具子	昭61～
	正木 治恵	平 3 ～
老 人 看 護 学	吉田 伸子	平 3 ～
小 児 看 護 学	吉武香代子	昭61

授 業 科 目	講 師	年 度
母 性 看 護 学	兼松百合子	昭61～
	内田 雅代	平 1 ～
	前原 澄子	昭60～
	石井 トク	昭60～
精 神 看 護 学	横田 碧	平 3 ～
看 護 研 究 概 論	鈴木 啓子	平 3
	内海 滉	平 3 ～
	土屋 尚義	平 3 ～
	阪口 禎男	平 3 ～
看 護 研 究	草刈 淳子	平 3 ～
	内海 滉	昭60～
	土屋 尚義	昭60～
	松岡 淳夫	昭60～
臨 地 実 習 指 導 方 法	阪口 禎男	昭60～
	鶴沢 陽子	昭60～
	金井 和子	昭60～
	草刈 淳子	昭60～
	杉森みど里	昭60～昭62
	佐藤 禮子	昭63～

授 業 科 目	講 師	年 度
看 護 学 校 管 理	西村千代子	平 3 ～
看 護 管 理	草刈 淳子	平 3 ～
家 族 社 会 学	宮本みち子	平 3 ～
	長山 晃子	平 3 ～
	桑野 陽子	昭60～平 1
	見藤 隆子	昭60
レ ク リ エ ー シ ョ ン 指 導	福尾 武彦	昭60～平 2
	地主 重美	昭61
	高見沢裕吉	昭61～昭62
	井出源四郎	昭63
特 別 講 義	吉田 亮	平 1 ～平 2
	南 裕子	平 3
	岩崎 栄	平 3 ～
	木村 康	平 3 ～
見 学	伊藤 暁子	平 3 ～
	筑波大学 附属病院	昭60～

看護婦学校看護教員講習会受講者一覧表

所属施設		年度 開催期間	昭和60年	昭和61年	昭和62年	昭和63年
		6.10～9.28	8.18～12.10	8.17～12.9	8.19～12.9	
病 院	北海道大学医学部附属病院	伊 藤 すず子			上 野 佐栄子	
	東北大学医学部附属病院				加 藤 美知子	
	秋田大学医学部附属病院	山 本 勝 則	佐 藤 栄 子			
	千葉大学医学部附属病院	田 中 友 子	鈴 木 とよ子	長谷川 章 子	八 代 レイ子	
	東京医科歯科大学医学部附属病院		湯 山 英 子	荒 井 洋 子		
	東京医科歯科大学歯学部附属病院		森 洋 子	清 野 路 子	大 畠 文 子	
	東京大学医学部附属病院	前 田 美弥子	早 川 真由美	請 田 早 苗	伊 倉 あけみ	
	新潟大学医学部附属病院	斎 藤 敬 子		矢 尻 文 江		
	金沢大学医学部附属病院	平 林 可寿子	坂 井 美智子	大 西 雅 子		
	信州大学医学部附属病院				松 本 あつ子	
	岐阜大学医学部附属病院	岡 田 民 子	松 田 好 美	磯 貝 貞 子	石 山 光 枝	
	三重大学医学部附属病院	奥 成 子	浜 地 祐 子	藤 本 美智代	上 野 敏 枝	
	名古屋大学医学部附属病院				田 中 さと子	
	京都大学医学部附属病院	鈴 木 絹 子	内 田 宏 美	米 沢 菊 美	秋 吉 和 子	
	大坂大学医学部附属病院	河 村 公 子	越 村 利 恵	杉 本 敏 江	渡 辺 笑 子	
	神戸大学医学部附属病院	高 馬 恵 子	李 宗 子	休 坂 みち子	中 田 登紀江	
	岡山大学医学部附属病院	平 松 京 子	黒 木 美津江	森 野 泰 子	藤 井 玲 子	
	山口大学医学部附属病院	内 田 孝 子				
	関 係 者	九州大学医学部附属病院	村 田 節 子		福 崎 裕 子	原 岡 直 美
熊本大学医学部附属病院		水 田 啓 子				
鹿児島大学医学部附属病院			富加見 美智子	栄 徳 範 子	船 倉 厚 子	
長崎大学医学部附属病院			大 道 真 澄			
札幌医科大学附属病院					伊 井 直 美	
福島県立医科大学附属病院					渡 辺 睦 子	
名古屋市立大学医学部附属病院		神 森 恵美子	岩 瀬 桂以子	河 井 洋 子	寺 尾 文 江	
〃				井 上 由美子	上 山 瑞 恵	
奈良県立医科大学附属病院		片 本 淳 子				
独協医科大学医学部附属病院				益 子 恵 子		
者	埼玉医科大学附属病院	樗 沢 厚 子	高 橋 久美子	佐 藤 悦 子	熊 本 左登美	
	杏林大学医学付属病院				土 田 よし子	
	杏林大学医学付属病院救命救急センター					
	昭和大学医学部附属病院	上 田 智 子				
	昭和大学医学部附属藤ヶ丘病院				中 林 照 子	
	昭和大学医学部附属豊洲病院					

平成元年	平成 2 年	平成 3 年	小計	計
8.18～12.15	8.20～12.19	8.26～2.21		
山 田 千津子			3	103 (国立)
松 本 恵 里	大 平 由喜子	佐 藤 永 子	4	
三 浦 昭 子	佐々木 由美子		4	
吉 田 智 子	猪 浦 友 子	宗 像 薫	7	
	柏 倉 淑 子	吉 田 早智子	4	
酒 井 美絵子			4	
佐 藤 博 子	杉 本 郁 子	富 取 こずえ	7	
坪 谷 泰 子	桑 原 由美子	渋 沢 幸 子	5	
山 上 和 美	村 田 裕 美	込 貝 かつみ	6	
二 木 朗 江			2	
松 本 亥智江	森 川 秀 美	高 橋 直 美	7	
明 石 恵 子	岸 孝 子		6	
			1	
道 下 陽 子	新 島 もと子	瀧 川 薫	7	
浪 下 和 子	森 田 輝 代	阪 下 麻由美	7	
有 田 瑞 江	吉 田 千代美	藤 原 瑞 枝	7	
吉 永 愉 加	矢 野 香 苗	久 保 五 月	7	
梶 村 光 枝	猪 上 妙 子	藤 井 美登里	4	
千 葉 郁 代	船 越 博 子	松 本 裕 子	6	
			1	
			3	
			1	
幾 世 みはる	竹 藪 規久世		3	16 (公立)
			1	
山 田 朋 子	三 浦 千 里	西 川 晶 子	9	
堀 口 陽 子		林 雅 美	3	70 (私立)
高 山 ちづ子	島 田 由紀子	額 額 葉 月	1	
			7	
		則 竹 敬 子	2	
	白 石 裕 子		1	
市 川 幾 恵	崎 山 恵 子	伊 藤 久 美	4	
			1	
	板 垣 敦 子		1	

所属施設		年度	昭和60年	昭和61年	昭和62年	昭和63年
病 院 関 係 者	東京医科大学病院			成 田 みゆき		鹿 野 貞
	東京医科大学霞ヶ浦病院			石 崎 しげ子	堀 本 薫	
	日本医科大学付属病院	佐 藤 トキ子	末 田 結 美	新飯田 ふさ子		
	日本医科大学第一病院	坂 本 なつ子				佐 藤 恵 子
	日本医科大学第二病院	横 葉 ヒトミ	横 山 はるみ			柴 田 康 子
	日本医科大学多摩永山病院	高 橋 久美子		飯 野 伸 子		
	聖アリアンナ医科大学病院		松 本 喜代子	藤 原 多鶴子		
	近畿大学医学部附属病院					
	関西医科大学附属病院					
	愛知医科大学附属病院					
	大阪医科大学附属病院					成 田 照 子
	〃					
学 校 関 係 者	久留米大学病院	森 美和子	平 田 ひろみ	森 本 紀巳子	今 泉 紀 子	
	福岡大学病院	宮 本 美枝子	石 橋 美津子	森 田 節 子	吉 川 千鶴子	
	秋田大学医学部附属看護学校					田 中 ま り
	東京医科歯科大学医学部附属看護学校			浅 野 裕 子		
	大阪市立大学医学部附属看護専門学校	樋 口 京 子				藤 原 弘 美
	〃					
	奈良県立医科大学附属看護専門学校		竹 内 昌 子	岡 本 千鶴子		吾 郷 久 恵
	独協医科大学医学部附属看護専門学校	南 條 玉 江	竹 沢 和 代			大 前 旬 子
	杏林大学医学部付属看護専門学校	石 田 君 代	岩 崎 昌 子			
	慶応義塾大学医学部附属厚生女子学院	尾 高 恵 子				
	昭和大学医学部附属看護専門学校			藤ノ木 和 代		
	昭和大学付属鳥山高等看護学校					
病 院 関 係 者	東京医科大学附属看護専門学校	津々木 和 美				
	東京医科大学霞ヶ浦看護専門学校	栗 山 尚 子				
	日本医科大学医学部付属看護専門学校	嶋 松 陽 子		市 川 茂 子		
	東京女子医科大学附属第二看護専門学校					伊 藤 美枝子
	金沢医科大学附属看護専門学校	斎 藤 優 子				
	近畿大学附属高等看護学校		竹 原 廣 子			
	愛知医科大学看護専門学校			高 木 三保子		
	北海道大学医療技術短期大学部	松 田 ひとみ	佐 藤 洋 子			菱 沼 紀 子
	秋田大学医療技術短期大学部					
	新潟大学医療技術短期大学部		風 間 悦			佐 藤 愛紀子
	金沢大学医療技術短期大学部					坂 井 明 美
	信州大学医療技術短期大学部	高 野 みどり				

平成元年	平成2年	平成3年	小計	計
西 山 正 恵	柴 田 智津子	金 田 博 美	5	70 (私立)
			2	
		門 井 典 子	4	
新 城 靖 子	田 中 弘 子		4	
飯 塚 かおり	下 地 一 美	藤 原 庸 子	6	
竹之内 明 美	大 力 和 子	河 村 加奈子	5	
			2	
西 村 佳奈美			1	
		築 地 純 子	1	
	水 野 めぐみ	郡 上 弘 恵	2	
真 地 あや子	牟 礼 洋 子	林 睦 美	7	
吉 岡 恵 子	柴 田 裕見子	田 尻 后 子		
橋 本 千津子	久木原 博 子	小 川 弘 子	7	
江 口 智 子	井 上 薫	徳 重 綾 子	7	
			1	2 (国立)
			1	
東 ますみ	前 田 勇 子	弓 場 紀 子	5	9 (公立)
川 島 正 子			3	
佐波瀬 好 子			4	21 (私立)
			2	
			1	
			1	
山 脇 準 子		山 田 ノリ子	2	
			1	
			1	
			2	
			1	
		山 本 由 美	2	
	下 野 文美代		2	15 (国立)
中 川 英 子			2	
	宮 島 直 子	横 山 留 美	5	
		菅 原 美保子	1	
			2	
			1	
			1	

所属施設		年度	昭和60年	昭和61年	昭和62年	昭和63年
学	名古屋大学医療技術短期大学部				伊 藤 泉	
	徳島大学医療技術短期大学部					東 玲 子
	山口大学医療技術短期大学部					
	九州大学医療技術短期大学部			佐 藤 香 代		
校	札幌医科大学衛生短期大学部				皆 川 尚 子	
	聖 母 女 子 短 期 大 学			小笠原 みどり		
	奈良文化女子短期大学	坂 本 雅 代			佐 伯 美恵子	
	銀 杏 学 園 短 期 大 学					柴 田 弘 子
関	産業医科大学医療技術短期大学					
	岐阜医療技術短期大学部					
	香 川 県 立 飯 山 高 等 学 校	清 川 初 美			小 川 佳 代	
	岡 山 県 立 落 合 高 等 学 校		梶 原 恵 子			稲 田 弘 子
係	岡山県立倉敷中央高等学校				小 池 智 美	
	岡山県立津山高等学校					
	聖カタリナ女子高等学校	菅 幸 子				
	中 村 女 子 高 等 学 校		棟 久 房 枝	松 本 美重子	田 中 愛 子	
者	希望ヶ丘学園加世田女子高等学校		高 野 裕 子	木 戸 純 子	恒 吉 加津子	
	出水学園出水中央高等学校		除 川 納 子			
	加 治 木 女 子 高 等 学 校		萩 原 タミ子			
	日 南 学 園 高 等 学 校					
計			38	36	38	39

平成元年	平成2年	平成3年	小計	計
	猪下 光	安藤 詳子	2	15 (国立)
			1	
			1	
			1	
		蒲沢 さゆり	2	2 (公立)
室田 穂			1	8 (私立)
			2	
			1	
元岡 美由紀	森川 美代子		3	
		足立 久子	1	
			2	7 (公立)
			2	
			1	
西山 禮子		和田 智恵子	2	
			1	12 (私立)
			3	
大田 優子	南田 幸子	竹之内 涼子	6	
			1	
			1	
		山内 節子	1	
40	36	39		266

Ⅲ 研 究 業 績

(昭和57年4月～平成3年12月)

継 続 教 育 研 究 部

看護継続教育の分野は看護と看護学とを実践し勉学する人の人格の陶冶と叡智の啓発におけるあらゆる問題を研究の対象とするため極めて多岐にわたるテーマが存在する。そこでは応用心理学、心身医学、教育学、行動計量学などの数多くの諸科学の協同による学際的アプローチを必要とする。教材研究の内容から考えれば、すべての看護学科が教育方法的に検討されねばならぬ所である。まさに、多様性こそは教育研究の特徴である。

初期の共同研究員としては、弘前大学より木村紀美、徳島大学より高田節子、熊本大学より木場富喜、産業医大学より花田妙子らが協力して看護継続教育の方法論の構築に貢献した。（敬称略、以下同じ）さらに、千葉大学の宇佐美寛、筑波大学の芳賀純、山口大学の川本利恵子らが教育学的教育心理学の方法論による基礎的業績をつみ重ねて、多くの研修生・講習生を学会に導いてくれた。すなわち、研修では第1回生の板橋イク子、喜多泰子、山川明子をはじめとし、山口千鶴子、前田良子、千葉由起子、三上ちず子、沢谷ゆき江、青木利律子など、一騎当千のさむらいたちが輩出した。また、看護婦学校教育講習会の講習生にも、課題研究においてまとめたものを看護婦の学会はもとより、応用心理学会や、心身医学会、教育技術学会などなどに発表した者：山本勝則、末田結美、早川真由美、吾郷文恵、柴田弘子、宮島直子、久木原博子など枚挙にいとまない。

継続教育研究部は、その研究の構成において、医学・心身医学・心理学・言語心理学・教育学・教育史・教育哲学などに焦点をあて、とくにその分野での業績をこしらえているので、上記各氏もほぼその分野でのテーマがまとめられた。すなわち、看護学生の適性の問題、看護実習前後の意識の変容、臨床における言語活動の習得、聴覚・視覚のマスクング現象などがレパートリィになっている。とくに言語の看護指導場面での研究は文部省科学研究費をうけ完成することが出来た。

看護学部より参加された共同研究としては、芽島、江守、桑名、工藤、今江ら前原一門の看護婦の性周期の心理生理学的追求や、横浜市立大学からは毎夏10数名の稲見グループが行った実験、温浴水浴の研究などあり、その成果は遠くドイツの国際学会に演題を提出するに到っている。

現在、松尾、草野、中、小池、森下、松下、佐藤、森、河原、樫本、猪下、金山、竹ノ上など数多くの人脈を得て、看護婦の行動的態度、自己評価・教育力、同一性、音刺激・光刺激の認知能力等をメルクマールとした広い意味での看護婦の看護意識と態度の形成に関する研究を続けている。

鶴沢は歴史学的立場より、2～3の共同研究員と共に、看護の発展に関わる問題にとりくみ、花島は、手術室看護や継続教育の実態などの調査に努力を重ね、それぞれの学会に発表している。

継続教育の研究は涯しなき拮据の中にある。よき看護婦を育てることと、よき看護婦を最高のコンディションにいつまでも保たせることに、あらゆる手段を講ぜねばならぬ。単なる補充的なカリキュラムにとどまることなく、看護婦としての生甲斐を向上し、充実した人生を設計し、もって社会のニーズにふりむけるという崇高なる難問を抱える分野である。

（内海 混）

業 績

1. 看護学生ならびに教育者の人格および学習・教育態度の研究

「学生」内海 滉他, 49応心論文集, 82; 内海 滉他, 日看研誌, 6 (1)51; 田中千鶴子他, 51応心論文集68; 川本利恵子他, 51応心論文69; 川本利恵子他, 日看研会誌 8 (臨) 63; 大谷真千子他, 日看研会誌 8 (臨) 63; 永楽伊律子他, 日看研会誌 8 (臨) 67; 中 淑子他, 日看研会誌 8 (臨) 74; 芽島江子他, 第4回日本思春期学会抄録集71; 川本利恵子他, 53応心論文集137; 田中千鶴子他, 日看研誌11(3)41-50; 田中千鶴子他, 日看研誌11(3)51-55; 草野美根子他, 第6回日看協長崎県支部看研集録45; 鈴木信子他, 日看研誌11 (臨) 95; 森下節子他, 日看研誌11 (臨) 95; 草野美根子他, 日看研誌11 (臨) 101; 青木利律子他, 日看研誌11 (臨) 102; 小池妙子他, 19日看集録 (教) 249~252; 村上生美他, 55応心論文集40; 草野美根子他, 55応心論文集42; 森下節子他, 55応心論文集43; 内海 滉他, 55応心論文集44; 中 淑子他, 55応心論文集63; 松尾典子他, 日本交流分析学会14回抄録集14; 小池妙子他, 20日看集録 (教) 156~159; 森下節子他, 20日看集録 (教) 160~162; 佐藤みつ子他; 56応心論文集59; 森下節子他, 56応心論文集60; 小池妙子他, 56応心論文集61; 草野美根子他, 56応心論文集62; 村上生美他, 56応心論文集63; 中 淑子他, 56応心論文集13; 坪屋悦子他, 日看研誌12 (臨) 64; 村本淳子他, 日看研誌12 (臨) 86; 竹ノ上ケイ子他, 日看研誌12 (臨) 86; 板橋イク子他, 日看研誌12 (臨) 87; 草野美根子他, 日看研誌12 (臨) 87; 中 淑子他, 日看研誌12 (臨) 88; 小池妙子他, 日看研誌12 (臨) 89; 鈴木信子他, 日看研誌12 (臨) 89; 玉木ミヨ子他, 日看研誌12 (臨) 90; 森下節子他, 日看研誌12 (臨) 90; 松谷千枝他, 日看研誌12 (臨) 108; 山本敬子他, 日看研誌12 (臨) 122; 佐藤みつ子他, 日看研誌12 (臨) 133; 川本利恵子他, 日看研誌12 (臨) 135; 青木利律子他, 日看研誌12 (臨) 149; 村上生美他, 日看研誌12 (臨) 152; 小池妙子他, 21日看集録 (教) 33~35; 佐藤みつ子他, 21日看集録 (教) 175~177; 森下節子他, 21日看集録 (教) 177~180; 森下節子他, 看護展望15(1)88-93; 「母性」竹ノ上ケイ子他, 日看研誌13(4)35-46; 竹ノ上ケイ子他, 日看研誌13 (臨) 100; 竹ノ上ケイ子他, 日看研会誌14 (臨) 169; 「小児」草野美根子他, 日看研誌13 (臨) 93; 「自己評価」佐藤みつ子他, 東京都立医療技術短期大学紀要 4, 105-117; 佐藤みつ子他, 日看研会誌14 (臨) 92; 佐藤みつ子他, 58応心論文集144; 中 淑子他, 58応心論文集234; 「自己教育力」森 千鶴他, 日看研会誌14 (臨) 92; 森 千鶴他, 58応心論文集146; 「看護態度」森下節子他, 日看研会誌14 (臨) 147; 小池妙子他, 日看研会誌14 (臨) 148; 森下節子他, 58応心論文集142; 「自我同一性」松下由美子他, 58応心論文集138; 松永保子他, 58応心論文集140;

2. 看護研究の教育およびその技術と哲学的検討

「学際性」内海 滉, 看護展望, 10(8)753; 「妥当性」鶴沢陽子, 看護研究, 15(1)33-37; 花島具子, 看護研究, 15(1)18-24; 鶴沢陽子他, 看護研究, 15(2) 1-14; 鶴沢陽子, 全国看護高校校長協会14東北ブロック研究大会集録 5; 「継続教育」田中京子他, 看護展望, 8 (10)27-40; 田中京子他, 看護展望, 8 (11)36-45; 内海 滉他, 日看研誌, 6 (1)26; 山川明子他, 日看研誌, 6 (1)52; 木村紀美, 日看研誌 6 (1)53; 内海 滉他, 看護研究, 16(4)325-326; 木村紀美, 日看研誌, 7 (臨) 41; 鶴沢陽子, 日看研誌, 7 (1)60-64; 鶴沢陽子, 看護教育, 25(6)390; 鶴沢陽子, 看護教育, 25(9)531-540; 内海 滉, 「ナー

シング・リサーチ（看護研究－その目的・手段・評価）医学書院，1984；「新卒者」木村紀美他，日看研会誌8（臨）39；山口千鶴子他，日看研会誌8（臨）39；「概念枠組」内海 滉，看護研究19（4）310-316；「継続教育ニード」花田妙子他，日看研会誌9（臨）60；花田妙子他，日看研会誌10（臨）42；「評価」鈴村初子他，日看研誌11（臨）103；川本利恵子他，56応心論文集64；松尾典子他，56応心論文集65；内海 滉，看護教育，31（3）：142-151；花島具子他，日看研会誌14（1）67-77；宮田智子他，日看研会誌14（臨）104；花島具子，日看研会誌14（臨）103；

3. 看護教育のカリキュラム史調査などの継続看護教育の内容の研究

「書評」内海 滉，看護研究，16（4）325-326；鶴沢陽子，看護教育，25（6）390；「近代看護教育」鶴沢陽子他，看護教育，23（9）544-554；「看護教育論」岸 好子他，看護教育，25（9）541-560；「院内教育」石垣靖子他，看護展望，9（11）61-72；鶴沢陽子他，看護教育，26（8）474-482；花田妙子他，日看研会誌8（臨）38；木村紀美，日看研会誌8（臨）39；内海 滉，日本教育技術学会発表要旨集，60～61；中林照子他，日看研誌12（臨）139；末永ちぢ代他，日看研誌12（臨）140；大西雅子他，日看研誌12（臨）140；宮田智子他，日看研誌12（臨）149；徳本弘子他，日看研誌12（臨）151；五十嵐美知子他，日看研誌12（臨）150；内海 滉：看護展望，14，（10）1089～1093；坂口登子他，看護展望14（3）：52-66；鶴沢陽子：近代日本看護名著集成（解説）看護婦養成の実際，大空社：133-138（初版）；柴田智律子他，日看研会誌14（臨）133；吉田千代美他，日看研会誌14（臨）95；上岡澄子他，日看研会誌14（臨）98；浅田妙子他，日看研会誌14（臨）98；鶴沢陽子，看護職の人々の継続教育の歴史の変遷，看護Mook，金原出版；

4. 看護ならびに教育における言語の研究

「医療場面」小笠原千恵子他，看護展望，7（11）986-999；内海 滉他，治療，65，195-199；内海 滉他，日本プライマリーケア学会誌，4，101；内海 滉他，49応心論文集，79；「幼児」遠藤小夜子他，日看研誌，6（1）56；遠藤小夜子他，50応心論文集69；「医療用語」岡田民子他，日看研会誌9（臨）59；「沈黙」山本勝則他，日看研会誌9（臨）51；「看護場面」山本勝則他，54応心論文集67；三上ちづ子，日看研会誌10（臨）60；竹原広子他，日看研誌11（臨）52；遠藤小夜子他，日看研誌11（臨）53；遠藤小夜子他，55応心論文集61；山本勝則他，55応心論文集62；「実習」山本勝則他，日看研誌12，（3）39-42；「児童」遠藤小夜子他，日看研誌12（臨）69；遠藤小夜子他，56応心論文集66；「臨床」柴田弘子他，日看研誌12（臨）98；加賀谷郁子他，日看研誌12（臨）98；山本勝則他，日看研誌12（臨）99；吾郷久恵他，日看研誌12（臨）99；内海 滉他，56応心論文集9；吾郷久恵他，56応心論文集10；山本勝則他，56応心論文集11；柴田弘子他，56応心論文集51；山本勝則他，日看研誌13（臨）117；石館美弥子他，日看研誌13（臨）117；石館美弥子他，心身医30（抄）81；松尾典子他，心身医30（抄）81；内海 滉他，57応心論文集99；山本勝則他，57応心論文集100；山本勝則他，看護技術，36（8）110-113，加賀谷郁子他，看護技術，36，（9）110-113；井上 薫他，日看研会誌14（臨）88；山本勝則他，日看研会誌14（臨）88；山本勝則他，58応心論文集136；

5. 看護ならびに教育における意識構造の研究

「看護活動重要度」喜多泰子他，日看研誌6（1）52；「院内オリエンテーション」板橋イク子他，日看

研誌, 6(1)53; 「死」加藤基子他, 51応心論文集91; 加藤基子他, 日看研会誌8(臨)48; 「看護教論」吉田しのぶ他, 52応心論文集48; 佐藤高子他, 心身医25(抄)72; 工藤祥子他, 心身医25(抄)73; 前原澄子他, 心身医25(抄)85; 「看護婦」小島久美子他, 日看研会誌8(臨)48; 「保健室」内海 滉他, 心身医26(6)490-499; 「糖尿病児」小泉滋子他, 53応心論文集138; 小泉滋子他, 日看研会誌9(臨)84; 「看護学生」内海 滉他, 53応心論文集139; 「継続教育」前田良子他, 日看研会誌9(臨)60; 「保母」中 淑子他, 日看研会誌9(臨)97; 「看護婦」片岡純子他, 日看研会誌9(臨)96; 「保母」中 淑子他, 54応心論文集66; 中 淑子他, 日看研会誌10(臨)55; 「看護教育」草野美根子他, 54応心論文集68; 「老人」小野沢康子他, 日看研会誌10(臨)73; 「臨床実習」松本喜代子他, 日看研会誌10(臨)81; 松本喜代子他, 日看協18集録(看護教育)104-106; 「入院患者」森山比路美他, 日看研会誌10(臨)85; 「糖尿病児」小泉滋子他, 看護展望13(9)84-89; 「患者認知」一条靖子他, 日看研誌11(臨)51; 朝久野洋子他, 日看研誌11(臨)52; 「母性意識」高橋真理他, 55応心論文集41; 村本淳子他, 日看研誌13(臨)56; 中 淑子他, 日看研誌13(臨)56; 森 千鶴他, 日看研誌13(臨)59; 佐藤みつ子他, 日看研誌13(臨)60; 松下由美子他, 日看研誌13(臨)97; 板橋イク子他, 日看研誌13(臨)99; 松尾典子他, 日看研誌13(臨)100; 小池妙子他, 57応心論文集94; 「自己教育力」森 千鶴他, 57応心論文集95; 佐藤みつ子他, 57応心論文集96; 松下由美子他, 57応心論文集97; 「実習態度」金山正子他, 57応心論文集98; 草野美根子他, 57応心論文集101; 中 淑子他, 57応心論文集102; 「交流分析」松尾典子他, 57応心論文集103; 松尾典子他, 日本交流分析学会, 15回抄録集39; 松尾典子他, 死の臨床13(2)99;

「看護婦」岩城直子他, 日看研誌13(臨)111; 森下節子他, 日看研誌13(臨)112; 柏倉栄子他, 日看研誌13(臨)113, 小池妙子他; 日看研誌13(臨)114; 「患者」戸沢和子他, 日看研誌13(臨)81; 森山比路美他, 日看研誌13(臨)82; 森下節子他, 57応心論文集87; 松田日登美他, 21看集録(成Ⅱ)256~258; 「精神病」金山正子他, 日看研会誌14(2)53-60; 川本利恵子他, 日看研会誌14(臨)83; 金山正子他, 日看研会誌14(臨)97; 金山正子他, 58応心論文集242; 金山正子他, 日看科学誌, 11(3)166; 「看護回想」高橋光枝他, 日看研会誌14(臨)89; 「老人」南田幸子他, 日看研会誌14(臨)78; 「時間構造化」松尾典子他, 心身医31(抄)101, 松尾典子他, 日看研会誌14(臨)131; 松尾典子他, 58応心論文集236; 松尾典子他, 日本交流分析学会16回抄録集47; 「看護教育」草野美根子他, 日看研会誌14(臨)93; 熊倉みつ子他, 日看研会誌14(臨)133; 「子供」中 淑子他, 日看研会誌14(臨)170; 「性」村本淳子他, 58応心論文集244;

6. 生理心理学的基礎の実験的研究

「心身医学」内海 滉他, 臨床医, 7(10)2236-2238; 内海 滉他, 看護研究15(1)1-104; 内海 滉他, 心身医学, 22, 95; 内海 滉他, 49応心論文集, 84; 「外科看護」鶴沢陽子他, 臨床看護, 8(2)270-287; 「皮膚科学」内海 滉他, 看護技術, 28(8)101-109; 内海 滉他, 看護技術, 28(9)101-109; 「血流」吉村直美他, 日看研誌, 6(1)40; 「心身医学」内海 滉他, 心身医学, 23(4)281-289; 内海 滉他, 心身医学, 23(抄)123; 「保健室」高橋かん奈他, 心身医学, 23(抄)123; 内海 滉他, 心身医学, 23(抄)116; 高橋かん奈他, 日看研誌6(1)59; 佐藤高子他, 50応心論文集44; 内海 滉他, 日本医事新報3106, 141; 「外科看護」大貫弘子他, 月刊ナーシング, 3(10)89-96; 大貫弘子他, 月刊ナーシング3(11)99-107; 「外科看護」小林三花他, 看護技術30(3)124-136; 八重尾和子, 15日看集

録(成人)133-135; 「心身医学」内海 滉他, 心身医学, 24(抄)115; 「血流」水谷薫里, 日看研誌, 7(臨)45; 内田聡美他, 日看研誌, 7(臨)46; 味酒理恵他, 日看研誌, 7(臨)46; 味酒理恵他, 51応心論文集68; 「老人」内海 滉他, Bulletin Faculty Education ChibaUniv. 33, 177-195; 中島紀恵子他, 2nd Int'l Congress Nurs Care of the Aged (Israel, Tel Aviv) 21; 「生活空間」内海 滉他, 52応心論文集47; 「血流」藤田雅巳他, 日看研誌8(臨)50; 今江淳子他, 日看研誌8(臨)52; 「小児」中野友子他, 日看研誌8(臨)59; 「性周期」芽島江子他, 思春期学4(1)122-128; 内海 滉他, 心身医26(抄)113; 佐藤高子他, 心身医26(抄)74; 千葉由起子他, 日看研誌9(臨)68; 尾高恵子他, 日看研誌9(臨)68; 「新生児」工藤美子他, 日看研誌9(臨)89; 「乳児」内海 滉他, 心身医27(抄)99; 芽島江子他, 心身医27(抄)145; 中島光恵他, 54応心論文集60; 「マスキング効果」末田結美他, 54応心論文集33; 「糖尿病児」土屋有利子他, 54応心論文集64; 小泉滋子他, 54応心論文集65; 「体位」佐藤栄子他, 日看研誌10(臨)47; 「血流」沢谷ゆき江他, 日看研誌10(臨)82; 黒木美津江他, 日看研誌10(臨)82; 稲見すま子他, 日看研誌10(臨)83; 早川真由美他, 日看研誌10(臨)86; 末田結美他, 日看研誌10(臨)87; 前田美弥子他, 日看研誌10(臨)87; 青木美智子他, 日看研誌10(臨)88; 「血流」内海 滉他, 心身医学28(抄)120; 矢尻文江他, 日看研誌11(臨)73; 高木三保子他, 日看研誌11(臨)74; 伊藤 泉他, 日看研誌11(臨)74; 井関典子他, 日看研誌11(臨)75; 稲見すま子他, 日看研誌, 11(臨)75; 郷津世志恵他, 日看研誌11(臨)76; 長谷川章子他, 日看研誌11(臨)76; 堀本 薫他, 日看研誌11(臨)77; 「心身医学」内海 滉他: 心身症診療Q&AⅡ「梅毒」六法出版社, 1022~1025; 内海 滉他: メンタルヘルス実践大系(2)からだの不調「皮膚系の不調」永田勝太郎編, 日本図書センター, 初版, 309~314, 1988; 内海 滉, 看護研究, 21(3)291~295; 「痛み」水口公信他, 心身医学29(抄)128; 藤井玲子他, 日看研誌12(臨)96; 「QOL」沢田和美他, 20日看集録(成Ⅱ)83~85; 「洗髪」佐藤愛紀子他, 日看研誌12(臨)96; 森 恵美他, 日看研誌12(臨)100; 「術前不安」原田千代子他, 日看研誌12(臨)110; 二渡玉江他, 日看研誌12(臨)113; 対馬みつ子他, 日看研誌12(臨)115; 稲田美奈子他, 日看研誌12(臨)116; 「血流」三上貴代他, 日看研誌12(臨)127; 渡辺笑子他, 日看研誌12(臨)127; 張替直美他, 日看研誌12(臨)128; 「足浴」稲見すま子他, 日看研誌12(臨)128; 「光刺激」船倉厚子他, 日看研誌12(臨)129; 大沼優美他, 日看研誌12(臨)129; 「騒音」森山比路美他, 日看研誌12(臨)136; 柴田康子他, 日看研誌12(臨)137; 金山正子他, 日看研誌12(臨)141; 「妊婦・褥婦」江守陽子他, 母性衛生30, (4)696; 桑名佳代子他, 母性衛生30, (4)697; 「心身医学」内海 滉: 身体各領域における心身症の特色(皮膚科の領域)「口腔心身医学臨床講座」第1巻総論編(監修池見西次郎), 第1版, 書林, 384~393; 「血流」真地あや子他, 日看研誌13(臨)60; 堀口陽子他, 日看研誌13(臨)61; 吉岡恵子他, 日看研誌13(臨)61; 元岡美由紀他, 日看研誌13(臨)62; 武田知子他, 日看研誌13(臨)62; 稲見すま子他, 日看研誌13(臨)63; 西山禮子他, 日看研誌13(臨)63; 二渡玉江他, 日看研誌13(臨)73; 「QOL」松田日登美他, 日本赤十字愛知女子短期大学紀要2(1)1-5; 「色彩」中村ます子他, 心身医31(抄)54; 内海 滉, 心身医31(抄)54; 牟礼洋子他, 日看研誌14(臨)106; 猪下 光他, 日看研誌14(臨)106; 久木原博子他, 日看研誌14(臨)107; 中村ます子他, 日看研誌14(臨)107; 内海 滉他, 58応心論文集238; 猪下 光他, 58応心論文集240; 「騒音」新島もと子他, 日看研誌14(臨)108; 吉田顕子他, 日看研誌14(臨)141; 「接触」宮島直子他, 日

看研会誌14(臨)109; 宮島直子他, 58応心論文集134; 「飲酒」佐々木由美子他, 日看研会誌14(臨)109; 「風刺激」松永保子他, 日看研会誌14(臨)110; 「温水・冷水刺激」竹藪規久世他, 日看研会誌14(臨)110; 「足浴」内海 滉他, XXte Congressus Internationalis Thalassotherapiae in Borkum (Germany), Zusammenfassungen 83 (20回国際水浴治療学会); 稲見すま子他, 日看研会誌14(臨)112; 「待ち時間」佐多道子他, 日看研会誌14(臨)144; 佐多道子他, 58応心論文集230; 「Burn-Out」水沢典子他, 日看感会誌14(臨)152; 「看護介入」二渡玉江他, 日看研会誌14(臨)154; 「乳幼児精神発達」草野美根子他, 58応心論文集232; 「心身医学」内海 滉: 皮膚患者の心理と行動, (岡堂哲雄編「健康心理学, 健康の回復・維持・増進を目指して」) 誠信書房1991; 桑名佳代子他, 心身医31(抄)102; 江守陽子他, 心身医31(抄)102; 内海 滉, 58応心論文集26-27;

7. 他

「英語論文」内海 滉, 看護研究, 16(1)61-64; (2)159-164; (3)240-245; (4)331-335; 17(1)68-74; (2)158-160; (3)256-266; (4)343-348; 18(2)211-217; (3)307-311; (4)399-406; (5)486-493; 19(3)293-300; (4)383-392; (5)472-479; 20(2)231-242; (3)316-319; (4)401-407; (5)475-484; 21(2)199-207; (3)283-290; (4)361-369; (5)461-467; 22(2)189-198; (3)273-284; (4)359-371; (5)472-481; 23(2)241-245; (3)339-344; (5)549-553; 24(1)73-82; (2)183-189; (5)474-483; (6)559-568; 「英語術語」Medica, Way 1(3)110; (5)88; (6)76; (7)125; (8)84; 2(3)40; (4)64; (5)40; (8)110; (9)117; (11)115; 3(2)98; (3)56; 「看護理論」内海 滉, 看護研究, 18(3)15-22; 23-31; 32-37; 38-42; 43-55; 56-62; 「翻訳」内海 滉, 看護研究20(4)381-389; 看護研究, 21(3)291-295; 「皮膚科教育」内海 滉, 暮らしと健康, 37(4)36-39; 内海 滉, 日本文化放送(1982.5.23; 10.24; 1983.2.20; 5.29; 9.25)内海 滉, 薬学向ラテン語入門, 南江堂, 1983; 内海 滉他, 海外旅行救急パスポート, 日本英語教育協会, 1983; 内海 滉他, 臨床医学大辞典, 講談社, 1983; 内海 滉, 文部省教科書「成人看護3」メヂカルフレンド社, 1984; 内海 滉他, 「医学生物学大辞典」(Dictionnaire français de medecine et biologie)メヂカルフレンド社1984; 内海 滉, 「心身症診療Q&A」六法出版社, 1984; 「皮膚科教育」内海 滉, 皮膚科系疾患と看護(看護学講座6 成人看護Ⅱ石川 中編)朝倉書店1986; 「洗剤」内海 滉, 『みんなで考える洗剤の科学』井上勝也編, 研成社, 1987; 「患者教育」内海 滉, 『慢性疾患の理解と患者指導のポイント』(2), 永田勝太郎編, 出版科学総合研究所, 1987; 花島具子『消化器疾患と看護・外科』平島 毅編著, 文光堂, 1987;

老人看護研究部

高齢化社会、長寿社会の認識は今日ではもはや一般化して単なる現状把握や問題提起ではなく具体的な対応が望まれる時代であり、緊急の課題として学際的な検討が精力的に展開されつつある。この中で看護の果す役割は極めて大きい、他の領域にも増して看護は生体の自然消滅に至る最終過程としての老化に尊厳な認識をもって対応すべき立場にある。その場合高齢者自身の尊厳は勿論であるが、同時に介護者および周辺社会の尊厳の保持も留意されなければならない。

当研究部の基本的立場は、高齢者に対しては障害の援助は勿論であるが、同時に高齢者の有用な機能の一層の利用、活性化が重要との認識にある。従って各個人の能力、障害に応じた最適な行動目標の設定、指導、支援の方途の考究と、その為の有効、安全な技術の確立による行動開発技術研究を一貫した中心テーマとしている。退行期における心身機能の変化は成人期の単なる量的縮小ではなく大きな質的变化を伴っている。それ故に負荷に対する応答やその表出、適応に成人とは異なった特徴がみられこれらの個別性の把握が情報の整理や判断、その結果の支援・介入方法選択の基本をなすものであろう。

このような考えに沿って当研究部の研究テーマをまとめると、(1)高齢者の心理特性(2)高齢者の生理特性、その結果としての(3)高齢者の日常生活および療養生活上の行動特性、このような対象に対しての(4)看護者・介護者側の特性に基づく状況把握や対応態度の特徴、これらに立脚した(5)日常生活援助技術の開発、またこのような看護対象者の増加による(6)施設内（病院、ホーム、中間施設）施設外（在宅）の看護管理、看護システム上の新たな問題(7)老人看護教育方法の確立などに分類されよう。

10年間の軌跡を今にして思えば、当初の数年間を対象の実態調査、心理、生理特性の把握が主体をなしていた。次いでこれらの経験を基に、高齢者の状態把握に一層適した検査方法の開発、個人的・社会的不適応状態の分析、逆に高齢者の心身適応に関する検討や援助技術に関する研究が当初よりも具体的・実践的な視点に基づいて実施されようになった。さらにその後は従来からの状態把握やセルフケア行動改善のための有効な支援の方途に関しても、自己の行動の強化生起と随伴性に関する場面と特性の相互の関連から個別性重視の視点が加わることによって、従来からの技術が一層具体的に方向づけられるようになった。また特にこの数年の、退院時・退院後指導や訪問看護、外来、ホームでの看護婦の役割など、施設内・外での看護機能や専門性に関する検討は、何れも看護の専門性に深くかかわる問題であり、今後も当然研究の重要なテーマと考えている。

センター発足以来昨年までの10年間の発表内容を下記に集録した。ここでは後日の利用の便を考慮して、やや詳細、具体的な項目分類を用いた。必要に応じご利用頂きたい。

（土屋尚義）

業 績

心理特性

性格, 不安

【ベッチェット】十束支朗他, 心身医学22(4): 289-294, 1982【ホーム老人】渡辺文子他, 女子医大短大紀要9: 9-15, 1987; 渡辺文子他, 日看研誌10(臨): 74, 1987; 渡辺文子他, 日看研誌11(臨): 94, 1988; 渡辺文子他, 女子医大短大紀要10・11: 55-59, 1989; 渡辺文子他, 日老社科学会32大会報告要旨集p119, 1990; 渡辺文子他, 女医大短大紀要13: 23-27, 1991【老化と適応】桜井澄枝他, 日看研誌6(1): 34, 1983【腎疾患】平井真由美他, 日看研誌6(1): 35, 1983【手術患者】並木喜一他, 日看研誌6(1): 36, 1983【性行動】須田峰子他, 日看研誌6(1): 33, 1983【有病高齢者 STAI】土屋尚義他, 日老社科学会26大会プログラムp7, 1984【幸福感】浦谷知佐子他, 日看研誌8(臨): 42, 1985; 河瀬比佐子他, 日看研誌9(臨): 66, 1986【性差, 年齢】大津ミキ他, 日看研誌8(臨): 42, 1985【入院満足度】豊沢英子他, 日看研誌10(臨): 73, 1987; 豊沢英子他, 日看研誌11(臨): 93, 1988【人生目的】藤野文代他, 女医大短大紀要13: 29-36, 1991; 藤野文代他, 日看研誌14(臨): 79, 1991

心理と行動, 適応

【看護学生】高橋俊江他, 日看研誌7(臨): 40, 1984; 柳沢ゆかり他, 日看研誌8(臨): 57, 1985; 藤野文代他, 日看研誌9(臨): 78, 1986【高校生活】柳沢ゆかり他, 日看研誌9(1, 2): 71-81, 1986; 柳沢ゆかり他, 日看研誌9(臨): 95, 1986; 柳沢ゆかり他, 日看研誌10(臨): 76, 1987; 柳沢ゆかり他, 日看研誌13(臨): 96, 1990【高齢慢性患者】藤野文代他, 女子医大短大紀要10・11号, 61-67, 1989; 藤野文代他, 日看研誌12(臨): 109, 1989【睡眠】山口渥子他, 日看研誌7(臨): 30, 1984【看護教員講習生】西村千代子他, 日看研誌7(臨): 41, 1984【手術患者】奥川直子他, 日看研誌7(臨): 55, 1984; 菊地寿美子他, 日看研誌7(臨): 56, 1984; 武井綾野他, 日看研誌8(臨): 71, 1985【ホーム老人】高野憲子他, 日看研誌10(臨): 77, 1987; 渡辺文子他, 日老社科学会31大会報告要旨集p111, 1989【入院不適応】和田精子他, 日看研誌11(臨): 77, 1988; 部谷智恵美他, 日看研誌12(臨): 110, 1989; 崎山恵子他, 日看研誌14(臨): 80, 1991【地域老人】山本享子他, 日看研誌14(臨): 79, 1991; 清水千代子他, 日看協群馬7回看研発表会集録p24-26, 1991【ICU患者】服部紀子他, 日看研誌11(臨): 78, 1988

心理検査法

【心理テスト】吉田伸子, 心理テストp495-504, 看護の科学社, 1983【STAI】市野桂子他, 日看研誌7(臨): 39, 1984; 土屋尚義他, 日老社科学会27大会報告要旨集p34, 1985【MAS】大津ミキ他, 日老社科学会26大会プログラムp7, 1984; 土屋尚義他, 日看研誌10(臨): 75, 1987【YG】大津ミキ他, 日老社科学会27大会報告要旨集p35, 1985【MHLC】関根剛他, 日看研誌12(臨): 70, 1989; 藤野文代他, 日看科会誌11(3): 178-179, 1991

生理特性

循環負荷

【食事】斎藤やよい他, 日看研誌 9 (臨) : 74, 1986 ; Yayoi Saito et al., Xth World Congress of Cardiology, Abstract, Washington, D.C., 1986 ; 斎藤やよい他, 臨床看護研究の進歩 1 (1) : 12-19, 1989【排泄】清島千晶他, 日看研誌 7 (臨) : 33, 1984 ; 萩沢さつえ他, 日看研誌 8 (臨) : 47, 1985 ; 河瀬比佐子他, 日看研誌 8 (臨) : 47, 1985 ; 萩沢さつえ他, 日看研誌 8 (3・4) : 14-18, 1986 ; 萩沢さつえ他, 呼吸と循環 35(1) : 65-69, 1987 ; Satue Hagsisawa et al., Progress in Cardiovascular Nursing, Vol. 3, Jan.-March, 1988【睡眠】吉田瑞穂他, 日看研誌 8 (臨) : 50, 1985 ; 本江朝美他, 日看研誌 13 (臨) : 74, 1990 ; 本江朝美他, 日看研誌 14 (臨) : 155, 1991【呼吸】柏谷由美子他, 日看研誌 13 (臨) : 74, 1990【清潔】石川民子他, 日看研誌 8 (臨) : 46, 1985 ; 河合笑子他, 日看研誌 9 (臨) : 71, 1986 ; 田中好枝他, 日看研誌 13 (臨) : 74, 1990【ベッド挙上】佐藤重美他, 日看研誌 7 (臨) : 31, 1984【会話・計算】渡辺麻理他, 日看研誌 7 (臨) : 34, 1984【点滴】柳沢ゆかり他, 日看研誌 11(4) : 25-33, 1988 ; 柳沢ゆかり他, 日看研誌 11 (臨) : 67, 1988

その他

【かゆみ】中尾久子他, 日看研誌 6 (1) : 34, 1983 ; 豊沢英子他, 日看研誌 6 (1) : 35, 1983 ; 豊沢英子他, 日看研誌 7 (3) : 44-50, 1984 ; 大津ミキ他, 日看研誌 7 (3) : 36-43, 1984 ; 中西悦子他, 日老社科学会報告要旨集 75, 1985【冷え】筒井裕子他, 日看研誌 13 (臨) : 129, 1990

看護業務

看護対象

【外来患者】下地一美他, 日看研誌 14 (臨) : 143, 1991【入院老人】吉田伸子他, 日看研誌 6 (1) : 32, 1983【臨床心理】土屋尚義, 千葉県精神科臨床心理研究会, 1984【看護度】熊田真紀子他, 日看研誌 10 (臨) : 41, 1987 ; 前田富士子他, 日看研誌 12 (臨) : 117, 1989 ; 川口ます他, 日看研誌 13 (臨) : 78, 1990【腎疾患】土屋尚義, 臨床透析 3 (12) : 1845-1846, 1987

看護婦特性

【看護生活】藤野文代他, 日看研誌 8 (臨) : 68, 1985 ; 藤野文代他, 16日看集録 (看護教育) p169, 1985 ; 河合千恵子他, 女子医大短大紀要 8 : 17-23, 1986 ; 河合千恵子他, 日看研誌 9 (臨) : 81, 1986【対象把握】池田優子他, 日看研誌 8 (臨) : 49, 1985 ; 大河原千鶴子他, 日看研誌 8 (臨) : 66, 1985 ; 赤井ユキ子他, 日本看研誌 9 (臨) : 81, 1986 ; 赤井ユキ子他, 日看研誌 10 (臨) : 70, 1987 ; 米田純子他, 日看研誌 14 (臨時) : 82, 1991【満足度】伊藤景一他, 日老社科学会 29 大会要旨集 P51, 1987 ; 伊藤景一他, 女子医大短大紀要 10・11 : 47-54, 1989【健康行動】山上和美他, 日看研誌 13 (臨) : 131, 1990

看護婦機能

【老人ホーム】山田泰子他, 日看研誌10(臨): 37, 1987; 小山幸代他, 日看研誌10(臨): 38, 1987; 小山幸代他, 日看研誌11(3): 14-26, 1988; 吉田伸子他, 日老人科学会32大会報告要旨p82, 1990; 吉田伸子他, 日看研誌13(臨): 128, 1990; 吉田伸子他, 日看研誌14(臨): 145, 1991; 吉田伸子他, 日老社科学会33大会報告要旨集p52, 1991

看護体制

【付き添い】吉田伸子他, 日看研誌9(臨): 80, 1986; 吉田伸子他, 日看研誌10(臨): 36, 1987
【手術部】田口智香子他, 日看研誌12(臨): 108, 1989; 宮川純子他, 日看研誌12(臨): 147, 1989
【勤務状況】赤井ユキ子他, 日看研誌12(臨): 117, 1989; 赤井ユキ子他, 日看研誌13(臨): 81, 1990; 柏倉淑子他, 日看研誌14(臨): 151, 1991

看護記録

【ワークシート】田中キミ子他, 日看研誌6(1): 45, 1983【現状分析】榎本麻里他, 日看研誌13(臨): 124, 1990【サマリー】梶村光枝他, 日看研誌13(臨): 125, 1990【送り】赤井ユキ子他, 日看研誌14(臨): 70, 1981

病棟構造

【精神科動線】並木喜一他, 日看研誌5(1): 99-101, 1982

援助技術

対象把握

【自閉症】新井奈穂他, 日看研誌6(1): 56, 1983【小児喘息】大島加奈子他, 日看研誌7(臨): 37, 1984【療養態度】藤野文代他, 日看研誌7(臨): 44, 1984; 杉本郁子他, 日看研誌14(臨): 81, 1991【状態把握】土屋尚義他, 症例による透析療法の実践p57-71, 中外医学社, 1983; 大河原千鶴子他, 日看研誌9(臨): 80, 1986; 赤井ユキ子他, 日看研誌11(臨): 78, 1988; 高橋真理他, 日看研誌11(臨): 94, 1988; 高橋真理他, 日看研誌12(臨): 112, 1989; 金井和子, 女子医大短大創立20周年記念シンポジウムp28-40, 1989; 渡辺文子他, 看護実践の科学15(7): 13-16, 1990; 宮越不二子他, 日老社科学会33大会報告要旨集p94, 1991; 【中・高校生】山口真智子他, 日看研誌7(臨): 39, 1984; 柳沢ゆかり他, 日看研誌12(臨): 70, 1989【老人観】大森武子他, 日看研誌10(臨): 70, 1987; 大森武子他, 女子医大短大紀要9: 1-7, 1987; 張替直美他, 7日看科学会講演集p94-95, 1987; 張替直美他, 女子医大短大紀要10. 11: 69-73, 1989; 中尾八重子他, 日看研誌13(臨): 127, 1990; 中尾八重子他, 日看研誌14(臨): 77, 1991; 桑原由美子他, 日看研誌14(臨): 78, 1991【臨死】杉野佳江他, 日看研誌9(臨): 62, 1986; 森洋子他, 日看研誌10(臨): 59, 1987; 大原宏子他, 日看研誌10(臨): 60, 1987; 荒井洋子他, 日看研誌11(臨): 50, 1988; 宮崎昌子他, 日看研誌12(臨): 131, 1989; 藤野孝子他, 看護実践の科学16(6): 1013, 1991

健康教育

【中・高年】平 美幸他, 日看研誌 6 (1) : 31, 1983 【スポーツ】倉持享子他, 日看研誌 6 (1) : 58, 1983 【アルコール】中尾久子他, 日看研誌 7 (臨) : 51, 1984 ; 大津ミキ他, 日看研誌 7 (臨) : 52, 1984 【教育環境】倉持享子他, 日看研誌 5 (1) : 108-111, 1982 【肝臓病】土屋尚義製作指導, すこやかシリーズ, 国保中央会, 1990 【ねたきり予防】土屋尚義製作指導, すこやかシリーズ, 国保中央会, 1990

看護技術

【赤沈】河合洋子他, 日看研誌11 (臨) : 67, 1988 【検脈】塚原節子他, 日看研誌12 (臨) : 103, 1989 【安静時心拍】宝田 穂他, 日看研誌13 (臨) : 30, 1990 【床上移動】萩元みゆき他, 日看研誌 6 (1) : 42, 1983 【寝衣交換】金沢トシ子他, 日看研誌14 (臨) : 157, 1991 【基礎看護技術】河合千恵子他編, 基礎看護技術マニュアル (I), 学習研究社, 1988 ; 大河原千鶴子他編, 基礎看護技術マニュアル (II), 学習研究社, 1988

生活援助

【日常生活労作】樋口久美子他, 日看研誌 6 (1) : 55, 1983 【食事】児島和枝他, 日看研誌 6 (2) : 52-67, 1983 ; 児島和枝他, 日看研誌 6 (1) : 55, 1983 ; 北村隆子他, 日看研誌11 (臨) : 80, 1988 ; 大串靖子他, 看護実践の科学15(7) : 13-16, 1990 「飲水」北原美里他, 日看研誌 7 (臨) : 33, 1984 【排泄】吉川政彦他, 日看研誌 8 (臨) : 56, 1985 ; 吉川政彦他, 同左, 8 (臨) : 56, 1985 ; 金井和子他, 日看研誌 8 (臨) : 57, 1985 ; 金井和子他, 日老社科学会27大会報告要旨集p76, 1985 ; 山田泰子他, 日看研誌 9 (臨) : 66, 1986 ; 田中英子他, 日看研誌 9 (臨) : 79, 1986 ; 田中英子他, 日看研誌10 (臨) : 71, 1987 ; 坂哉繁子他, 日看研雑誌10 (臨) : 72, 1987 ; 関 初子他, 日看研誌12 (臨) : 102, 1989 ; 高見沢恵美子他, 日看研誌13 (臨) : 75, 1990 ; 金井和子他, 3 老人泌尿器科研究会プログラム集p11, 1990 ; 河瀬比佐子, 看護実践の科学15(9) : 13-16, 1990 ; 石川民子他, 女医大短大紀要13 : 43-48, 1991 ; 石川民子他, 日看研誌14 (臨) : 154, 1991 ; 菱田清子他, 日看研誌14 (臨) : 155, 1991 ; 【清潔】田中好枝, 看護実践の科学15(11) : 13-16, 1990 【睡眠】柏谷由美子, 看護実践の科学15(12) : 13-16, 1990 ; 板垣敦子他, 日看研誌14 (臨) : 143, 1991 ; 小坂橋喜久代他, 日看科会誌11(3) : 78-79, 1991 【運動障害】泉キヨ子, 看護実践の科学15(13) : 13-16, 1990 【療養態度・動静】山口桂子他, 日看研誌 4 (3) : 52-62, 1982 ; 佐藤栄子他, 日看研誌 5 (1) : 101-103, 1982 ; 平井真由美他, 日看研誌 6 (1) : 37, 1983 ; 平井真由美他, 同左, 6 (1) : 37, 1983 ; 小山幸代他, 日看研誌 6 (1) : 38, 1983 ; 山田泰子他, 日看研誌 6 (1) : 38, 1983 ; 山田泰子他, 日看研誌 7 (臨) : 28, 1984 ; 宮崎和子他, 日看研誌 7 (1)・(2) : 81-95, 1984 ; 山田泰子他, 日看研誌 8 (臨) : 66, 1985 ; 小山幸代他, 日老社科学会30大会報告要旨集p98, 1988 【行動開発】土屋尚義他, 日看研誌 6 (1) : 20-25, 1983 ; 大津ミキ他, 日看研誌 6 (1) : 24-25, 1983 【かゆみ】佐藤博子他, 日看研誌13 (臨) : 69, 1990 【寝たきり】渡辺タツ他, 看護実践の科学16(1) : 10-13, 1991 【痴呆】井上弘子, 看護実践の科学16(3) : 10-13, 1991 【コミュニケーション】筒井裕子, 看護実践の科学16(2) : 10-13, 1991 【病棟環境】小坂喜久代他, 日看研誌13 (臨) : 83, 1990

自己管理

【呼吸器】吉田伸子他，看護技術28(5)：87-100，1982【糖尿病】赤井ユキ子他，15日看集録（成人）p5-8，1984；岡田きょう子他，日看研誌8（臨）：71，1985；中武桂子他，日看研誌13（臨）：130，1990；（循環器）斎藤やよい他，日看研誌13（臨）：133，1990；斎藤やよい他，女医大短大紀要13：37-41，1991【服薬】飯塚かおり他，日看研誌13（臨）：69，1990

手術・手術患者管理

【脳動脈瘤】網屋タエ子他，日看研誌6（1）：54，1983；網屋タエ子他，日看研誌7（3）：10-16，1984【開頭術】伊藤洋子他，日看研雑誌10（臨）：68，1987【消毒】並木喜一他，日看研誌7（臨）：54，1984；網屋タエ子他，日看研誌7（臨）：55，1984；網屋タエ子他，日看研誌9（3）：16-22，1986【循環器】本江朝美他，日看研誌7（臨）：53，1984【悪性腫瘍】越村利恵他，日看研誌10（臨）：66，1987【ストーマ】和田清子他，日看研誌11（臨）：91，1988；城戸良弘他，日看研誌14（臨）：84，1991；佐竹恵美子他，日看研誌14（臨）：116，1991；村田裕美他，日看研誌14（臨）：119，1991【股関節】泉キヨ子他，日看研誌12（臨）：100，1989；泉キヨ子他，金大医技短大部紀要Vol. 13p21-24，1989；泉キヨ子他，日看研誌13（臨）：71，1991；泉キヨ子他，日看研誌14（臨）：119，1991【手術患者】網屋タエ子，看護実践の科学16(4)：10-13，1991【疼痛】中村美優他，日看研誌12（臨）：114，1989

病態，生活指導

【心，妊娠】江戸由子他，日看研誌5（1）：120-121，1982；江戸由子他，日看研誌6（3）：20-28，1983【腎，妊娠】島田馨他，日看研誌5（1）：119-120，1982；島田馨他，母性衛生23(3)：95，1982【心疾患】佐藤貴美子他，日老社科学会29大会要旨集p68，1978；佐藤貴美子他，日看研誌11（臨）：79，1988

継続看護・訪問看護

【家族指導】大河原千鶴子他，日看研誌10（臨）：64，1987【在宅ケア】大河原千鶴子他，日老社科学会29大会要旨主p26，1987；小船憲子他，18日看集録（地域）p15-18，1987；大河原千鶴子他，日老社科学会30大会報告要旨集p58，1988；小山洋美他，日老社科学会31大会報告要旨集p42，1989；青木主税他，日看研誌13（臨）：129，1990；大河原千鶴子他，看護展望16(1)：86-94，1991；中野悦子他，日看研誌14（臨時）：81，1991；佐山ミサヨ他，日老社科学会33大会報告要旨集p80，1991；金井和子，高齢者等の在宅療養支援のための調査・検討事業報告所p101-121，1991；大河原千鶴子，看護実践の科学16(5)：10-13，1991【外来ケア】前田純子他，日老社科学会32大会報告要旨集p77，1990

看護研究，看護教育

【ばけ】井上弘子他，日看研誌6（3）：63-70，1983；井上弘子他，日看研誌6（1）：33，1983；Hiroko Inoue et al., 2nd International Conference on Nursing Care of the Aged. Abstracts, p14, Tel Aviv, 1985【ICU】森山節子他，日看研誌11（臨）：54，1988【付き添い】柳沢千衣他，日看研誌11（臨）：88，1988【研修】金井和子他，看護教育25(1)：15-18，1984；木場富喜他，看護教育25(12)：

728-738, 1984; 金井和子, 7日看護科学会講演集p19-1987【研究方法】土屋尚義, 日看研誌9 (1・2): 58-61, 1986【看護研究】金井和子, 済生644: 1-13, 1982; 吉田伸子訳, 看護研究15(1): 3-10, 1982; 金井和子他訳, 看護研究, 日看協会出版会, 1984; 金井和子, 日本病院会雑誌31(8): 14-27, 1984; 土屋尚義, 日看研雑誌8 (臨): 33, 1985; 金井和子, 2日看研近畿・四国地方会, 1987; 金井和子, Leader Nurse 2(1): 32-37, 1988; 金井和子, 同左, 2(2): 24-29, 1989; 金井和子, 同左, 2(3): 34-38, 1989; 金井和子, 同左, 2(4): 32-39, 1989; 土屋尚義, 日看研誌12(1): 11-20, 1989; 金井和子, 月刊ナーシング10(12): 50-51, 1990【臨床実習】土屋尚義, 臨床実習指導1(4): 86-90, 1988; 土屋尚義, 同左, 1(5): 68-71, 1989; 土屋尚義, 同左, 2(2): 75-78, 1989【老人把握】金井和子, The Shunin 3(1): 82-88, 1989; 金井和子, The Shunin 3(2): 119-121, 1989; 金井和子他, 老人看護学(小島操子, 金川克子編), p26-46, 標準看護学講座28, 金原出版, 1991【研究評価】金井和子, 看護展望13(10): 1133-1136, 1988【看護教員】伊藤暁子他, 厚生行政科学研究, 1989; 吉田時子他, 13日看集録(看護教育)p136-143, 1982; 吉田時子他, 13日看集録(看護教育)p170-176, 1982; 吉田時子他, 13日看集録(看護教育)p143-148, 1982; 安川仁子他, 38国立病院療養所総合医学会, 1983; 田島桂子他, 同左, 1983【看護学生】大河原千鶴子他, 日看研誌11(臨): 100, 1988; 清水千代子他, 日看研誌14(臨): 104, 1991; 藤田美津子他, 日看研誌14(臨): 128, 1991【教授状況】田島桂子他, 1, 3日看集録(看護教育)p149-153, 1982【看護過程】金井和子編著, 看護過程へのアプローチ1, 学習研究社, 1984; 金井和子編著, 看護過程マニュアル, 学習研究社, 1987

看護管理研究部

昭和57年看護実践研究指導センターが設置された当時の研究部の陣容は松岡淳夫前教授、草刈淳子助教授、山口桂子教務職員と阪口禎男助教授の4名であった。設置と同じくして、研究施設の新設拡充のため、まず、看護行動の人間工学的分析研究用に画像解析装置を、ついでポリグラフ、サーモグラフィなどを購入するとともに、環境問題のための細菌実験室の充実を行ない、共同研究員、研修生の受け入れに備えた。ちなみに、看護管理の研究テーマは

1. 看護行動の効率化に関する研究（阪口、草刈）

1) 看護作業研究 2) 看護基準に関する研究 3) 看護診断に関する研究 4) 看護機器具の研究 5) 看護環境、施設に関する研究

2. 看護情報管理に関する研究（阪口、草刈）

1) 看護記録に関する研究 2) 情報伝達連絡に関する研究 3) 看護事故に関する研究

3. 看護組織制度に関する研究（草刈）

1) 看護制度・組織比較研究 2) 専門看護婦の検討

4. 職員の育成（草刈）（キャリア開発及び職務満足）

5. マンパワー計画（草刈）（看護職者の就業状況の調査研究）など5つからなる。

その後、開設2年後に山口教務職員が愛知医療短大に栄転されたが、久々に、平成元年度、川口孝泰教務職員が入って、計4名となりさらに人間工学的研究に拍車がかかっている。しかし、残念ながら、松岡前教授は看護の効率化を目標にその数式化を完成させて、昨年定年退官された。

一方、昭和57年センター発足当初より国公立大学病院看護管理者講習会（10日間）が文部省委託により実施され、さらに昭和60年から同様に看護学校教員講習会（4ヶ月、平成3年度からは6ヶ月）も始まり、一人一題の看護研究で、当研究部のテーマに沿った研究を行なってもらい、研修生と併せて、毎年、学会等で数多くの発表を行なっている。

また、平成2年度にはブラジルのバイア国立看護大学助教授（看護管理）の多原・佐藤・民子アンジェラ氏（現在、東京大学保健学科客員助教授）、平成3年度には札幌医科大学附属病院の高田貴美子氏を委託研究生として、また、平成2年度の7月9日から3週間ではあるが、O.D.Aを通じて厚生省看護研修研究センターに来られたパキスタンのイスラマバード看護大学教員Miss. STELLA NAZIRの研修等も受け入れ、国際交流の一端を担っている。

過去9年間の研究部の研究業績を次に示すが、著書、原著、学会発表併せて328件である。文献それぞれを、詳述するには紙面の都合でかなり省略せざるを得ない。

まず、大分類として、病院看護管理、医療管理、保健、教育、その他の5分類とし、さらに病院看護管理は組織・看護管理一般、患者、看護婦、看護業務、環境（細菌、褥創、その他）の6つに、医療管理は法・制度・コスト、医療システム・組織・在宅ケア、ヘルスマンパワー、医療関係業務と看護の4つに分類して掲載した。なお、文献の見方は代表者名、雑誌名、巻、頁の順に示されている。

今後、看護管理研究部は大学院博士過程設置に向かって、更なる飛躍、発展をしたいと考えている。

（阪口禎男）

業 績

病院看護管理

[組織・看護管理一般]

川口孝泰他, 日看研誌10(臨)39; 菅田勝也他, 日看研誌11(臨)62; 浅井美千代他, 日看研誌11(臨)61; 川口孝泰他, 日看研誌10(2)62-71; 加藤美智子他, 日看研誌11(臨)61; 阪口禎男, 第8回千葉県母性衛生学会抄録9-23; 松岡淳夫他, 看護展望10(10)54-62; 草刈淳子, 看護研究15(5)1-12; 松岡淳夫他, 日看研誌6(1)16; 松岡淳夫, '87HEAD NURSE93-97; 松岡淳夫, 日看研誌7(1・2)9-12; 野島幸子他, 日看研誌12(臨)148; 加藤美智子他, 日看研誌10(臨)38; 松岡淳夫, '87HEAD NURSE85-89; 松岡淳夫他, 看護教育27(10)600-609; 友藤敬子他, 日看研誌7(4)47-55; 二木朗江他, 日看研誌13(臨)79; 草刈淳子他, ナースステーション17(1); 草刈淳子, 医療'87, 3(11); 松岡淳夫, ヘッドナース創刊号14-18; 草刈淳子他, 看護ムック29金原出版13-17; 支藤敬子他, 日看研誌7(臨)45; 境美代子他, 日看研誌10(臨)39; 山口桂子他, 日看研誌6(1)46; 巽妙子他, 日看研誌12(臨)120; 渡辺美和子他, 日看研誌10(1)86-87

[患 者]

白井喜代子他, 日看研誌13(1)73-81; 山口桂子他, 日看研誌5(臨)24; 佐藤香代他, 日看研誌9(臨)72-77; 山口桂子他, 看護研究15(5)51-56; 今井訓子他, 第4回千葉県母性衛生学会抄録; 竹之内明美他, 日看研誌13(臨)92; 上野敏江他, 小児看護13(3)1798-1801; 坂井明美他, 日看研誌13(臨)86; 西村佳奈子他, 日看研誌13(臨)91; 安田文子他, 日看研誌12(臨)85; 坂井明美他, 日看研誌12(臨)81; 田中まり他, 日看研誌13(臨)89; 加藤光宝他, 第21回日本病院管理学会抄録39-40; 梅田嘉子他, 日看研誌13(臨)90; 伊集院朋子他, 日看研誌12(臨)116; 足立陽子他, 日看研誌8(3)-(4)19-25; 阪口禎男他, 母性衛生24(3・4)196; 山口桂子他, 母性衛生24(3・4)195; 坂井明美他, '89日本母性衛生学会抄録58; 田中まり他, '89日本母性衛生学会抄録56; 東玲子他, 日看研誌12(臨)126; 津田征枝他, 日看研誌12(臨)115; 平松京子他, 日看研誌9(臨)73; 岩本仁子他, 日看研誌12(2)21-30; 阪口禎男他, 母性衛生27(4)758-761; 坂井明美他, 金沢大学医療技術短期大学紀要13 31-36; 平松京子他, 日看研誌12(3)22-28; 阪口禎男他, 母性衛生2 107-113; 浅井美千代他, 日本母性衛生学会誌27(3)505; 岩本仁子他, 日看研誌11(臨)89; 坂井明美他, 第22回国際助産婦連盟学術大会抄録; 川口孝泰他, 日看研誌11(臨)82; 皆川尚子他, 日看研誌11(臨)82; 阪口禎男他, 母性衛生27(4)751-757; 山口桂子他, 日看研誌4(3)52-62; 阪口禎男, 第5回千葉県母性衛生学会; 上野敏枝他, 日看研誌12(臨)112; 岩本仁子他, 日看研誌10(臨)64; 鈴木とよこ他, 日看研誌10(臨)46; 岩本仁子他, 第28回日本母性衛生学会; 今井訓子他, 第6回千葉県母性衛生学会; 石崎しげ子他, 日看研誌10(臨)65; 今井訓子他, 第28回日本母性衛生学会; 松野かおる他, S62厚生科学研究報告書; 坂井美智子他, 日看研誌10(臨)47; 浅井美千代他, 第26回母性衛生学会抄録; 山口桂子他, 第26回日本母性衛生学会抄録; 阪口禎男他, 713回千葉医学会例会産婦人科分科会; 高塩恵子他, 日看研誌9(3)78-79; 阪口禎男他, 日看研誌10(臨)65; 内藤明子他, 日看研誌9(3)79-80; 足立陽子他, 日看研誌9(3)92-93; 飯野伸子他, 日看研誌11(臨)57;

白井喜代子他, 日看研誌10(臨)45; 森川ともみ他, 第3回千葉県母性衛生学会抄録; 高橋久美子他, 日看研誌10(臨)69; 今井訓子他, 母性衛生28(4)639; 岩本仁子他, 母性衛生28(4)553; 川口みゆき他, 日看研誌9(3)60; 片本淳子他, 第1回日看研近畿四国地方会抄録

[看護婦]

加藤光宝他, 第27回日本病院管理学会抄録: 市川幾恵他, 日看研誌13(臨)114; 吉川千鶴子他, 第7回千葉県母性衛生学会抄録; 深沢佳代子他, 日看研誌12(臨)119; 吉川千鶴子他, 日看研誌12(臨)122; 前田三枝子他, 日看研誌11(臨)103; 草刈淳子(共訳), 看護研究21(4)33-40; 草刈淳子, 看護40(2)20-35; 角谷英子他, 日看研誌13(臨)116; 阪口禎男他, 日看研誌12(3)15-21; 道下陽子他, 第5回日本保健医療行動学会; 湯山英子他, 日看研誌10(臨)37

[看護業務]

草刈淳子, 看護展望10(1)64-69; 川口孝泰他, 日看研誌9(3)83-84; 中村喜代美他, 日看研誌9(3)63-64; 足立陽子他, 第3回千葉県母性衛生学会抄録; 草刈淳子(共訳), 「看護診断マニュアル」へるす出版; 星野佐和子他, 千葉県立衛生短期大学紀要4(2)35-41; 矢野真智他, 第2回千葉県母性衛生学会抄録; 矢野真知他, '84日本母性衛生学会総会抄録; 出来田満恵他, 日看研誌7(臨)42; 池田明子他, 母性衛生25 201-205; 宮腰由紀子他, 母性衛生24(3・4)109; 池田明子他, 母性衛生24(3・4)109; 宮腰由紀子他, 母性衛生23(3)114; 宮腰由紀子他, 日看研誌5(臨)16; 阪口禎男他, 母性衛生24(1)58-62; 大竹保代他, 日看研誌5(1)94-96; 阪口禎男他, 千葉県衛生短期大紀要1(1)19-25; 池田明子他, 母性衛生23(3)117; 坂井靖子他, 日看研誌9(3)59-60; 川口孝泰他, 日看研誌9(1・2)96-102; 寺西久美子他, 日看研誌5(臨)29; 加藤美智子他, 日看研誌10(1)78; 境美代子他, 日看研誌10(1)79; 阪口禎男他, 千葉大学教育学部紀要31(2)127-133; 宮腰由紀子他, 母性衛生23(1)89-93; 伊藤すず子他, 日看研誌10(1)80-81; 横山はるみ他, 日看研誌10(臨)40; 野島良子(共訳), 看護診断医歯薬出版1-78; 杉浦亮子他, 日看研誌12(臨)119; 草刈淳子, 看護展望13(2)102-105; 渡辺秀俊他, 日看研誌10(臨)64; 湯山英子他, 日看研誌10(4)60-70; 斉藤優子他, 日看研誌10(2)106-107; 三浦昭子他, 第7回千葉県母性衛生学会抄録; 望月美奈子他, 日看研誌10(2)107-108; 浅里いさお他, 日看研誌13(臨)77; 阪口禎男他, 日看研誌12(臨)121; 谷口満子他, 日看研誌11(臨)92; 熊副マサ子他, 日看研誌12(臨)119; 太田久子他, 日看研誌12(臨)119; 加藤美智子他, 日看研誌11(臨)65; 宮腰由紀子他, 日看研誌4(3)27-35; 松本亥智恵他, 日看研誌13(臨)80; 松田公夫他, 日看研誌11(臨)65; 川口孝泰他, '89日本建築学会大会梗概集; 阪口禎男他, 日看研誌11(臨)64; 明石恵子他, 日看研誌13(臨)122; 阪口禎男他, 日看研誌11(臨)64; 三浦昭子他, 日看研誌13(臨)92; 高村美智子他, 日看研誌10(臨)36; 岡野節子他, 日看研誌12(臨)118; 川口孝泰他, '90日本建築学会大会梗概集; 草刈淳子, 看護展望13(6)100-103; 高草木伸子他, 日看研誌13(臨)80; 杉本敏江他, 日看研誌11(臨)63; 草刈淳子, 看護実践の科学14(1)17; 東ますみ他, 日看研誌13(臨)77; 江口智子他, 日看研誌13(臨)78; 阪口禎男他, 日看研誌13(1)95-104; 草刈淳子, 看護教育28 603-613; 石山光枝他, 日看研誌12(臨)120

[環境－細菌]

笠松美喜子他, 日看研誌 7 (3)17-26 ; 寺尾文江他, 日看研誌12 (臨) 77 ; 小笠原みどり他, 日看研誌10 98-107 ; 塚原佳子他, 日看研誌 9 (1・2) 91-95 ; 岡崎愉加他, 日看研誌13 (臨) 87 ; 藤原弘美他, 日看研誌12 (臨) 75 ; 天津栄子他, 日看研誌10(3)69-70 ; 加藤美智子他, 日看研誌10(2)109-110 ; 天津栄子他, 日看研誌10 (臨) 44 ; 八代レイ子他, 日看研誌12 (臨) 77 ; 加藤美智子他, 日看研誌 9 64-71 ; 浪下和子他, 日看研誌13 (臨) 106 ; 小笠原みどり他, 日看研誌10 (臨) 48 ; 松田好美他, 日看研誌10 (臨) 48 ; 川島正子他, 日看研誌13 (臨) 106 ; 田中さと子他, 日看研誌12 (臨) 76 ; 加藤美智子他, 日看研誌 6 (1)48 ; 市川茂子他, 日看研誌11 (臨) 70 ; 塚原佳子他, 日看研誌 7 (臨) 51 ; 加藤美智子他, 日看研誌 9 (3)46-47 ; 高木一枝他日看研誌 9 (3)87-88 ; 松岡淳夫他, 大塚製薬製剤研究所研究報告

[環境・褥瘡]

松岡淳夫他, 医科器械学56(3)13-17 ; 川口孝泰他, Research MA Journal 8 10-17 ; 加藤美智子他, 日看研誌10(2)99-100 ; 川口孝泰他, 日看研誌 6 (3)51-62 ; 加藤美智子他, 日看研誌10(3)24-35 ; 川口孝泰他, 医療器械学雑誌56 (臨) 130 ; 加藤美智子, 日看研誌10(3)24-35 ; 川口孝泰他, 日看研誌 6 (1) 48 ; 陳素 郷他, 日看研誌 5 (臨) 21 ; 阿部テル子他, 日看研誌 7 (臨) 47 ; 川口孝泰他, 日看研誌 7 (4)40-46 ; 川口孝泰他, 日看研誌 7 (臨) 48

[環境・その他]

広瀬正夫他, '89日本インテリア学会梗概集 ; 川口孝泰他, '89日本インテリア学会梗概集 ; 岩本仁子他, 日看研誌13(2) 7 -14 ; 古賀紀江他, '89日本インテリア学会梗概集 ; 川口孝泰他, 学校研究 5 225-229 ; 渡辺秀俊他, '89日本インテリア学会梗概集 ; 川口孝泰他, '90日本インテリア学会抄録 ; 星野佐和子他, 日看研誌 9 (3)64 ; 大前句子他, 日看研誌12 (臨) 137 ; 松岡淳夫, 看護展望12 3-10 ; 中村喜代美他, 日看研誌 9 (1・2) 82-90 ; 坪谷泰子他, 日看研誌13 (臨) 65 ; 木島真理子他, 日看研誌 7 (臨) 49 ; 古賀紀江他, '89日本建築学会梗概集 ; 加藤美智子他, 日看研誌13 (臨) 64 ; 望月美奈子他, 日看研誌 6 (臨) 20 ; 川口孝泰他, 日看研誌13 (臨) 83 ; 大前句子他, 日看研誌13 (臨) 84 ; 佐渡瀬好子他, 日看研誌13 (臨) 84 ; 川口みゆき他, 日看研誌 8 (3・4) 33-41 ; 伊井直美他, 日看研誌12 (臨) 101 ; 渡辺秀俊他, 日看研誌13 (臨) 116 ; 寺内文雄他, '90日本インテリア学会抄録 ; 平川美智子他, 日看研誌 5 (臨) 19 ; 岩本仁子他, 日看研誌12 (臨) 125 ; 小野清美他, '90日本インテリア学会抄録 ; 古賀紀江他, '90日本インテリア学会抄録 ; 冠木美喜子他, 日看研誌 6 (1)39 ; 山田朋子他, 日看研誌13 (臨) 108 ; 平川美智子他, 日看研誌 5 (1)92-94 ; 川口孝泰他, 日看研誌10(1)79-80 ; 川口孝泰他, 日看研誌13(1)82-94 ; 望月美奈子他, 日看研誌 7 (3)27-36 ; 川口孝泰他, 日看研誌12(1)74-83 ; 渡辺秀俊他, 日看研誌 9 (臨) 57 ; 中村喜代美他, 日看研誌 7 (臨) 35 ; 川口孝泰他, 建築雑誌104 (1288) 143-144

医療管理

[法・制度・コスト]

草刈淳子, 看護36(6)26-37; 草刈淳子, 看護展望9(9)55-59; 草刈淳子(共著)「最新看護学全書」(10)メデイカルフレンド社; 草刈淳子, 看護38(2)138-145; 草刈淳子, 看護展望9(3)53-57; 草刈淳子, 看護展望12(11)137; 草刈淳子, 日本評論社4 213-236; 草刈淳子他「衛生法規」メデイカルフレンド社156-176; 水戸修他共著, 新看護学全書(11): 179-200; 木戸 修, 草刈淳子, 最新看護学全書10「衛生法規」, メデイカルフレンド社; 草刈淳子, 保健の科学30(1)4-5; 草刈淳子, 看護研究15(2)77-87; 草刈淳子, ジュリスト804 14-22

[医療システム・組織・在宅ケア]

草刈淳子, 看護研究16(3)61-64; 草刈淳子, 看護展望8(9)53-57; 草刈淳子, WHO西太平洋地区事務局主催; 草刈淳子他, 看護管理1(1)2-12; 長瀬真由美他, 日看研誌7(臨)44; 草刈淳子, 看護展望11 60-65; 松野かほる他, 公衆衛生情報17 29-37; 草刈淳子, 看護展望12(6)131; 草刈淳子, 看護展望10(3)62-67; 草刈淳子他, 保健婦雑誌42 60-72; 草刈淳子, 看護技術35(8)204-214; 松岡淳夫, '88HEAD NURSE66-72; 草刈淳子, 第2回看護歴史学会; 草刈淳子, 看護学雑誌51(8)785-788; 草刈淳子, ナースステーション15(1)9-23; 草刈淳子, 第18回日本医事法学会; 草刈淳子, 厚生科学研究65-90; 草刈淳子, 第11回国際医史学シンポジウム; 横葉ひとみ他, 日看研誌10(1)86; 秋元貴久子他, 日看研誌9(3)35; 草刈淳子, 日本経済研究センター報告(日米医療比較)650-666; 草刈淳子他, 第20回病院管理学会抄録

[ヘルスマンパワー]

草刈淳子, '89日本学術会議, 医療教育/医史学研連シンポジウム; 草刈淳子他, 病院管理26(1)31-46; 草刈淳子, 看護展望8(3)54-57; 草刈淳子他, 病院管理20(4)319-327; 横葉ヒトミ他, 日看研誌9 47-54; 岸田弘美他, 日看研誌7(臨)38; 草刈淳子, 看護展望11; 草刈淳子, ナースステーション17 45-53; 草刈淳子, 看護展望11 6-7; 青木和夫他, 第22回日本病院管理学会抄録; 草刈淳子, 医療'89 5 (12) 38-39

[医療関係業務と看護]

阪口禎男, 千葉県母性衛生学会誌2 9-23; 草刈淳子, WHO西太平洋事務局; 金川克子他, 日本公衆衛生雑誌34(10)187

保 健

阪口禎男, 千葉大教育学部紀要33(2)197-211; 岩本仁子他, 第6回千葉県母性衛生学会; 松本美重子他, 日看研誌11(臨)55; 坂井登志子他, 日看研誌12(臨)82; 阪口禎男他, 千葉大学教育学部紀要32(2)155-162; 松本あつ子他, 日看研誌12(臨)80; 岩本仁子他, '89日本母性衛生学会抄録; 高浜浩美他, 千葉大学教育学部紀要33(2)148-155; 鈴木庄亮他共著, 「THIハンドブック」114-121;

大場みゆき他, 小児保健研究41(6)52-62; 岩本仁子他, 母性衛生23(1)83-87; 嶋田 馨他, 母性衛生23(3)95; 岩本仁子他, 日看研誌13(臨)86; 山口桂子他, 日看研誌10(臨)53; 草刈淳子, 日看協会199-240

教 育

山口桂子他, 第13回日本看護学会－看護教育－41-47; 近田敬子他, 日看研誌10(臨)78; 高野裕子他, 日看研誌10(臨)77; 草刈淳子(共訳), 「看護モデル, その解説と応用」日本看護協会出版; 鈴木秀美他, 日看研誌5(2)9-19; 市瀬陽子他, 日看研誌10(臨)76; 草刈淳子, 保健の科学27(12)806-810; 佐伯美恵子他, 日看研誌11(臨)98; 幾世みはる他, 日看研誌13(臨)122; 市瀬陽子他, 日看研誌11(臨)96; 近田敬子他, 日看研誌11(臨)103; 松田ひとみ他, 第4回千葉県母性衛生学会抄録; 鈴木秀美他, 日看研誌5(1)111-113; 松田ひとみ他, 日看研誌10(3)57-58; 松岡淳夫, 日看研誌5(1)48-58; 近田敬子他, 日看研誌12(臨)92; 松田ひとみ他, 日看研誌9(臨)83; 秋山正子他, 日看研誌12(臨)91

そ の 他

外丸和弘他, '82日本産婦人科学会千葉地方部会発表抄録; 太田順子他, '84日本産婦人科学会千葉地方部会; 草刈淳子他, 看護研究17(2)65-83; 阪口禎男他, 生涯婦人科学6 308-343; 片岡恵津子他, 日看研誌5(臨)27; 草刈淳子(共著), 「調査と研究」学習研究社; 山口真智子他, 日看研誌7(臨)39; 松岡淳夫他, 千大看紀要(5)71-81; 松岡淳夫, 市原市環境白書96-97; 片岡恵津子他, 日看研誌7(1・2)105-116; 松岡淳夫, 看護教育30(2)83-87; 阪口禎男, 生涯婦人科学6 347-357; 田中保代他, 日看研誌4(3)36-44; 松岡淳夫, 日看研誌13(1)39-44; 阪口禎男, 生涯婦人科学6) 344-346

IV 創立10周年記念公開シンポジウム

千葉大学看護学部附属看護実践研究指導センター 創立10周年記念公開シンポジウム

平成4年2月15日(土) 14時～16時30分

於 千葉大学医学部附属病院第一講堂

「看護における生涯教育に果たすセンターの役割」

1) 看護教育における生涯教育の位置づけ

千葉大学教育学部教育方法学講座教授 宇佐美 寛

2) 看護界における生涯教育の現状と問題点

木村看護教育振興財団常務理事

前 厚生省看護研修研究センター所長 伊 藤 暁 子

3) 大学におけるセンターの将来像によせて

千葉大学看護学部看護教育学講座教授 杉 森 みど里

司会 千葉大学看護学部

附属看護実践研究指導センター継続教育研究部教授 内 海 滉

日夜進歩を続ける看護学において、最先端をゆく業務にたえる看護婦を供給するためには、up-to-dateの知識と技術との継続的な教育援助が必要である。かかる臨床実践での継続教育は、現在各方面で需要がきわめて高く、また、わが国でも各所にその機関が設けられて、着実に成果をあげつつある。今後ますますその努力を積み重ねてゆかねばならない。その為には、特に、教科内容の選定、カリキュラムの優先性、機関、施設の経営、指導者の養成などの種々の問題が山積している。

千葉大学に全国で初の国立での看護学部が生まれてから、数多くの人士を輩出したが、また、昭和57年にさらに上記の意向をふまえて「看護実践研究指導センター」が発足し全国共同利用施設として、全国各地より多数の管理者・指導者・研究者・看護婦諸氏の勉学する所となり、ここに10年を経過した。この時に当りて、その方向を検討するのは正に有意義なことである。各講師はそれぞれ第一線において継続教育に当たられておる方々であり今回、大いにその問題への意識を高めてゆこうと考える次第である。

看護教育における生涯教育の位置づけ

宇佐美 寛

I

センターでの講習会は短期間なのだから、学習内容を厳選すべきである。他の機会にも学べるような情報は要らない。また、学問・技術の進歩に即応するといっても、進歩の結果の新情報を多く与える方式は成り立たない。不消化のまま多量の情報をつめこむことになるだけである。

センターを離れても自力で学習していけるような基礎学力をこそ養うべきである。換言すれば、センターに来なくても現場において研究を行い得るような体制が必要である。全ての看護者がそれぞれの場で学習しつづけるべきなのである。センターは、そのための基礎となる力を養うのである。この基礎学力の多くの部分は、もともと学校で育てるべきものであったのに学校では育て得なかった能力である。センターは、学校が教育し得なかった内容を遅まきながら代わりに教育するのである。

II

私には、センターが受講生に対するどのような教育的効果を意図しているかの全体像は、わからない。私自身は、次のような考えで授業をしている。

講義は受講生を楽にさせ受身にさせる。講義するくらいなら、その内容を文章に書いて読ませればよいのである。文章ならば、くり返し読むことも、ゆっくり読むことも出来る。センターの講習会は短期間であり、受講生は専門的職業人である。私は語るだけ相手は聞くだけという一方的コミュニケーションである講義を強いるのは気の毒である。

＜基礎学力＞は、少なくとも私の担当科目のような文科系の場合、文章の読み書き能力である。この能力があれば、教育学領域では、自力で学習を続けていくことが可能である。また、この基礎学力が弱い状態では、新しい情報を与えても、理解し思考の材料として使用することが出来ない。

読み書き能力を育てる授業の方法については、次の四つの要件を重視している。

1. 読むことと書くことを関連させる。例えば、ある文章を読み、それを論評する文章を書くという活動をさせる。
2. 読み書き、いずれも具体的で問題性が明瞭な事例についてである。
3. 文章の解釈のしかたや書きかたの評価がすぐに返ってくるフィードバックを保障する。
4. 評価のための目標をしぼる。（一文の形式が論理的であることを重視する。段落の評価は、より後の段階で行なわれる。）

看護界における生涯教育の現状と問題点

— 院内教育の実施状況の調査結果から —

伊 藤 暁 子

1. 調査した86施設では、新採用者研修以下、対象別に7区分できる研修を年間延376行っていた。多い研修は、新採用者、看護婦、看護管理者で、ついで臨床指導者研修となる。開催時間帯は、勤務時間内が約55%を占め、新採用者、看護婦、臨床指導者研修がこれに該当する。看護管理者研修の場合は時間外が約34%で他に講演形式の研修も時間外開催が多い。研修の日数は1～30日に及び、平均日数の長いものは看護管理者と新採用者研修である。

研修の内容は、看護研究、リーダーシップ、コミュニケーションなど多岐にわたる。方法としては新採用者研修の約75%を最高に講義が多い。対象の看護経験年数が増加するにつれ、グループワークの比率が上り、看護管理者研修では約40%を占める。講義とグループワーク併用もみられるが実習は少ない。

担当講師の約55%が看護職である。臨床指導者や看護管理者研修では、看護職講師が60%を上廻る。しかし看護管理者研修の部下の育成・能力の開発の部分は、他の外来講師を招くなど、内容によって講師陣に変動がある。研修成果の把握は、レポート、アンケート及び感想文が中心となっている。

これらの研修は、教育委員（会）の企画によるものが約55%で、他に専任教育婦長（17%）と看護管理部門（10%）の企画がある。研修企画者達は内容の選定・予定・評価・対象別の計画・参加意欲向上など、さまざまな課題をかかえている。

2. 現状からみた生涯教育の問題点と看護実践研究指導センターに望むこと

各病院では、自分達で資質の向上を図るべく勤務時間内外を問わず、積極的に研修を実施している。しかし以下の問題点をもち、必ずしも成果があがっているとは思われない。

- 1) 内容が対象の経験年数に応じ段階的に選定されていないなど、一貫生がなく総花的である。看護学校での学習内容との関連も不明確である。
- 2) 講義が方法の主流となっており、受身的な学習に終わっている。身近な問題を自分達自身で問題解決を図るよう具体的な内容を知恵をしばって考え出す方法にかえるべきである。
- 3) 研修成果の把握がアンケート・レポート・感想文によりなされ評価基準も曖昧なまま行われている。研修毎の目標と内容と関連した評価を系統的に行う必要がある。

以上から、看護実践研究指導センターでは、特に看護管理者と専門看護婦など実践の場の指導者の育成に力点をいただきたい。看護職員生涯教育検討会の結論と社会人教育のニーズ拡大に対応する大学開放の提言をふまえ、当センターが、さらに看護関係者に門戸を拡大し、全国的規模での指導者の力量向上にさらに寄与されるよう期待する。

大学におけるセンターの将来像によせて

杉 森 みど里

国立大学唯一の看護学部は学部付属の教育研究施設として「看護実践研究指導センター」が置かれている根拠となる省令は、国立学校設置法施行規則第20条の4の11であり、その条文には「千葉大学看護学部は、看護学の実践的分野に関する調査研究、専門的研修その他必要な専門的業務を行い、かつ、国立大学の教員その他の者で、この分野の調査研究に従事するものに利用させるための全国共同利用施設として、看護実践研究指導センターをおく。」と定められている。

センター10年のあゆみは千葉大学広報第62号¹⁾に詳しい。しかしながら一方では、このような研究施設での研究は、国・公・私立の別なく、また基礎研究・応用研究の別を問わず、「大学の自治」の下で行われることも当然とされている。

そこでこの与えられた好機に、看護学部の長期計画委員会において考えられて来た大学におけるセンターの将来像を基盤に、平成3年4月19日に提出された中央教育審議会からの答申「新しい時代に対応する教育の諸制度の改革について²⁾」の中で述べられている生涯学習社会への対応等を参考に、看護学部の付属研究機関としてのセンターの将来像を描いてみることにした。

(図1.参照)

センターに寄せる多様な要請は、おおそ以下のようにまとめられる。

I. 看護学体系化をめざす要請

1. 学問領域の拡大と深化

(1) 拡大(対社会人): 学校制度の持つ特性を十分に活用し、学位につながる看護学領域の確立

(2) 深化(対専門家):

a. nurse-scientist 育成制度の確立

b. nurse-practitioner 育成制度の確立

2. 国際的・国内的な情報の収集

(1) 全国的な看護学研究に関する情報収集: Ex. The Center for Nursing Research at the University of Michigan

(2) 国際的な看護学研究に関する情報収集: Ex. WHO Collaborating Center for Nursing Development in Primary Health Care (@St. Luke's College of Nursing)

II. 生涯学習に関する社会的要請

1. 生涯学習における大学の役割拡大

(1) 公開講座、聴講制度、昼夜開講制、夜間大学院等の教育システム網の作成と開設

(2) 看護教育及び指導者の育成機関としての役割拡充

2. 全国看護学研究センターとしての役割拡充

III. 医療機関からの要請

1. 医育機関から医療機関への門戸の解放

IV. 看護学部卒業生からの要請

1. 専門性の開発・深化への助成

2. 学部各講座間との連携研究プロジェクトの拡張・実施を通して実践的研究の推進

3. リカレント教育による再就職の推進

以上のような社会的要請を受けて立つには、アメリカの看護学部が付属機関として持つ看護学研究センター³⁾と提携を進めることも重要な活動の1つとなるであろう。特にミシガン大学の看護研究センター⁴⁾のように、情報収集・発信の出来る研究部を開設し、学部学生の情報機器に関する教育を連携させるなどのダイナミックな活動を展開することはセンターの活性化に大きく貢献すると思われる。

さらには day-care 研究部を開設し、平成4年4月から実施される高齢者保健福祉推進10ヶ年戦略に引き続き、次なる社会的要請に看護学がどのように応え得るかについて、現在各講座が実施している day-care を実践的展開として社会的に応用し、その実績を公開して行く必要がある。

これらを長い時間をかけて、ゆっくりでも良い確実に看護界の発展の為に看護学部のセンター事業として具体化して行きたいと願っている。

参考文献

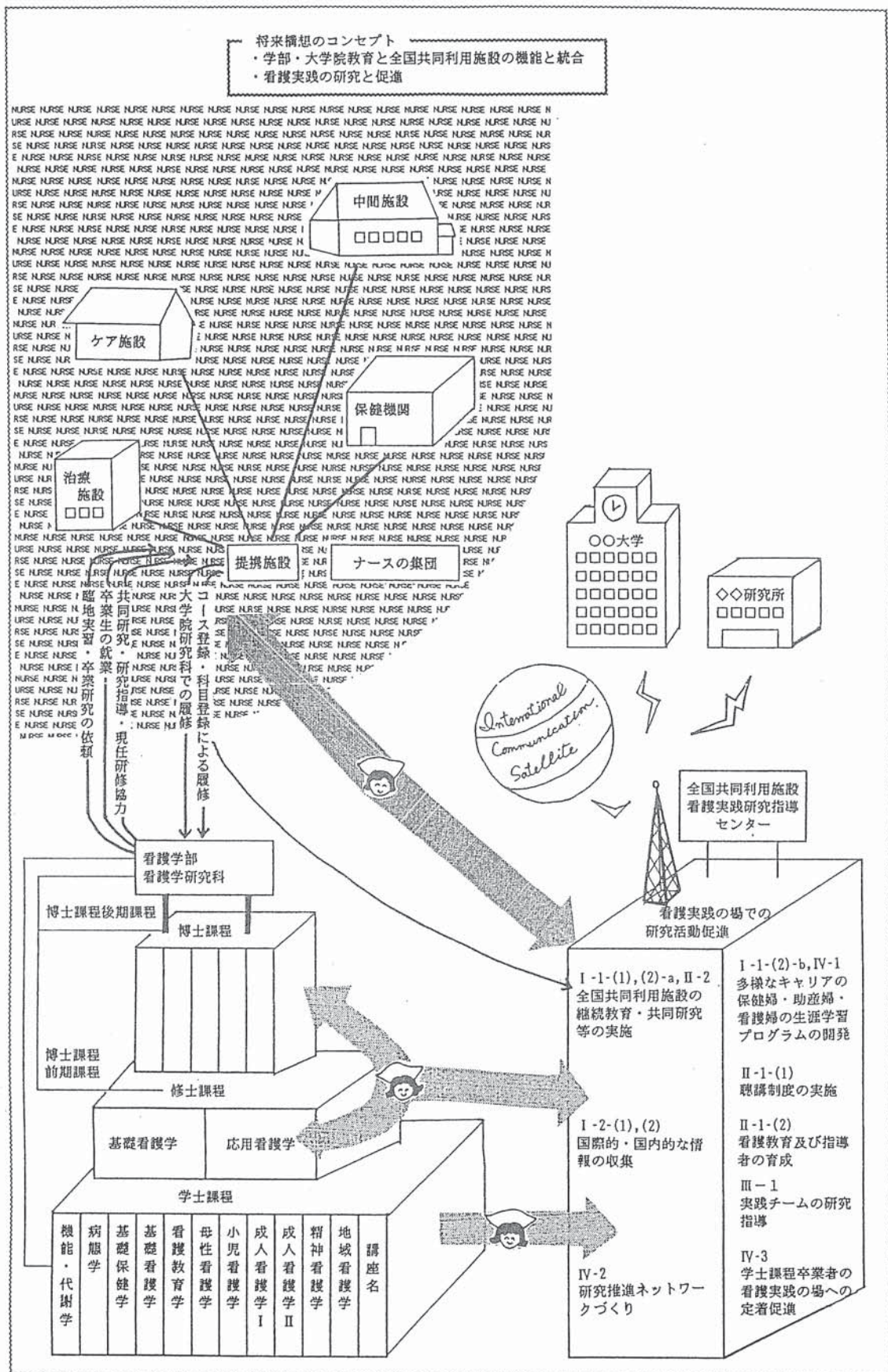
1. 看護学部付属看護実践研究指導センター10年のあゆみ、千葉大学広報、第62号、平成3年9月10日発行

2. 新しい時代に対応する教育の諸制度の改革について(全文)、中央教育審議会答申、文部広報第893号、平成3年4月20日発行。

3. Research Center Directory, (12th Edition 1988), Vol. 1, Gale Research Comp.

4. Judy G. Ozbolt, Promoting Nursing Research The Center for Nursing Research at the University of Michigan, Western Journal Nursing Research. Vol. 8. No. 1, 1986.

図1. 千葉大学看護学部の将来構想図解



質疑応答

喜多泰子（長崎大、看護部長 第1回研修生）：

厚生省健康政策局長の私的懇談会「看護職員生涯教育検討会」の試案について質問したい。

伊藤暁子：「三月中には公表したい」と聞いている。内容は「リフレッシュ」と「専門」という区分になっており、種々の問題提起がされると聞く。問題はそれをどう具体化するかということ。

門脇豊子（厚生省看護研修研究センター所長）：

昨年4月より所長を継いでいる。三先生の御発言、是非とも実現をと拝聴した。これからの社会需要に対応する看護実践のためには資質の向上が極めて重要である。実現に向けての御提言を伺いたい。杉森先生には現状から、伊藤先生には昨年誕生した木村看護教育振興財団がどんなふうにかかわりをお持ちいただけるのか、宇佐美先生には看護職以外の立場から苦言でも。厚生省の検討会も間もなく大変練ったものが出るようであるが、実現に向けてというところが大変問題。過去にもすばらしい御意見・御提言をいただいているが結局なきに等しい結果になっているものも多い。そうさせないで、実現に向けるような具体的御助言をいただきたい。

杉森みど里：将来構想図解参照。博士課程後期課程については調査費が平成4年度についたもので夢ではなくなってきつつある。「臨地実習・卒業研究の依頼」、「共同研究・研究指導・現任研修協力」はすでに行っている。「大学院研究科での履習」は、いろいろなところに就職した学生たちが修士課程に帰ってくるということが日常的になっている。「コース登録・科目登録による履習」は平成6年以降に少しずつ形をとっていくのではないかな。社会人入学の問題は、看護学部の長期計画委員会、教務委員会などで検討中。3年課程の看護婦学校を卒業し、数年の臨床経験をもち、将来看護教員になるという意

志をもつ看護婦で、大学での学習をした方がいいという人がセンター試験などを通らずに入学できる特別選抜課程というコースを考えた。平成5年度をめざしていたが否決され現在平成6年度をめどに動いている。看護婦学校3年課程を経た看護婦が、単位を認めてくれる方がいいと言われる方がいる。しかし、看護婦学校が大学なり短大になった時に、学校教育制度の教育と看護婦学校-training schoolとはどちらがうのかということ、自分が1年生から4年生まで看護学部の教育を受けることによって理解してもらいたい。そういう意味で、単位を加算して2年で出るとか、3年で出るとかは今考えていない。

提携施設については、数年の間に提携施設として契約をして、学部の学生達がここで実習をさせていただく現場に対して、看護学部が何か貢献できないかと研究中である。

全国共同利用施設としては、殆んどできていることが多い。しかし、学部と矢印のあるところは、センターで講習を受けたことで単位認定することができないかということである。単位授与機構というのが発足しているので、短大の卒業生が受講した場合、「この人を大学の卒業生として認めてくれるかどうか」という申請ができる。コース別だとか科目別だとかの履習をしたときに大学では単位を認定できるということが唯一厚生省関係の施設とはちがう点である。これからセンターでもそれができれば高等教育を受けたという一つの資格のようなものが積み上げられる。今、30位の大学・短大をつくるのに教員不足がある。看護教員が少しでも大学教育とは何なのかを知ったうえで大学をつくっていただけるよう学部・センター共に協力できると思っている。

伊藤暁子：厚生省の検討会の結論は、かなり本質的な問題提起という形で多分でてくる。その中に杉森先生の言われた認定制度の問題も1つ軸

として出ている。財団では、理事会で基本方針を決めるので多分理事会は通るだろうという前提で話す。今までは、厚生省で看護課を中心に提言されたが、提言を具体化するレベルの予算的処置がされなかったという経緯がある。今回はそのへんを財団で何とかカバーしてくれという話が内々きており、実はこれをさせていただく方向で検討している。したがって具体化するところの研究推進というところに何らかのお手伝いをさせていただこうと考えている。どういう研究者に集まってもらい、どういう形でやるかなどを看護課ともども相談しながらマニュアル作り、具体化というあたりをお手伝していくことになる。

宇佐美寛：教育だろうと看護だろうと実践にかかわる学問あるいは教育は、まず具体的でなければいけないと何とかの一つおぼえのように言っている。たとえば、看護関係の学科の授業がどういうプロセスになっているのかの録音なり録画なりによるデータの分析を私はあまり見たことがない。そういうことを皆さん共有なさっておられるのか。あるいは院内研究会などの録音の段階から、くり返し他の人が分析するということまでいっているのか。そのような具体的な情報があればこちらもいろいろ考えようがある。そういう具体性と透明性がないので、門外漢にはよくわからないことになっている。

山川明子（山形大、看護部長 第一回研修生）：宇佐美先生の御質問にお答えする資料はもっていない。現場ではそれぞれの委員会なり担当者なりによって多少分析はされているが、確かにそのようには分析していない。

伊藤先生に質問。生涯教育のシステムの図解をスライドでみせていただいたが、その中に専門看護婦と管理者の研修があった。その両者の役割分担をどのように考えておられるのか。私の頭には専門看護婦と看護管理者と重なる部分がある。

伊藤暁子：管理業務・婦長業務と専門家は役割は全く別であるべき。日本には専門の指導者は現存しない。米国でクリニカル・ナース・スペシャリスト（CNS）の資格をとってきた方はおられるが教育職にある。日本には、CNSの役割を果す土壌がまだできていない。人を先に養成すべきか、ニーズを分析してから人を養成すべきか、いろいろな考え方はある。差別（三層）になるから反対という意見もある。しかし、管理業務だけで大変複雑な要因があるのに加えて、専門の力量をあげるということを一人でやるというのは無理がある。役割は絶対分けるべき。そうすると、そういう人をどう育てていくかが急務になる。看護協会で諮問されているが、早く定着させてもらいたい。財団では、リンダ・エイケン（ペンシルバニア大教授）の講演をしたり、来年からベスイスラエル病院に研修生を派遣するなど土壌を作るため情報を集めている。ベスイスラエル病院はマグネットホスピタルと言われ、看護婦の定着がすごくいい。定着が良い要因が、専門がかなり生かされる制度になっているということ。例えば看護事故が起きた時、事故が起きたのはなぜか、宇佐美先生の言われたように、具体的に分析をする教育を受けた看護婦CNS（保証ナースというのか）がいて、問題解決をはかる。CNSは良く活用されて良い仕事をし、日常の業務に反映されてマグネットホスピタルとなる。これらを日本で実現するにはまだまだ時間がかかるだろうが、そういう方向に指向すべきと考える。

アンジェラ・民子・佐藤・多原（ブラジルマイヤ国立総合大学助教授 東京大学客員助教授）：1990～1991年研究生としてセンターで「看護教育」と「看護管理」について学ばせていただいた。その時に宇佐美・伊藤・杉森先生にも御指導を受けた。センターでの教育は、宇佐美先生の言われた生涯教育の三つの目的「1. 学校で教育しそなった内容の補充、2. 学校での教

育のさらに先の内容を教える延長、3. 学校での教育内容の旧く不適当なものになったのを改め教える更新（改変）」を果たしていたと思う。あらゆる場面からの講師を迎え高度な教育がなされていた。ブラジルには三通りの看護教育がある。准看護婦教育（中卒後2年間の教育）、技術看護婦教育（中卒後技術高校に入り1年間の基礎教育と3年間の看護教育）、看護婦教育（大学4～6年間で学位取得、その上に大学院）である。大学院はCNSのコース、マスターコース、その上にドクターコースがある。それらの教育内容と比較すると、センターでの教育内容はブラジルのCNSの大学院コース程度に等しいと思った。日本では看護大学・大学院が少ない。その中にセンターがあって日本各地から集まった人達に高度な教育をしていることは、各地においてリーダーシップがとれる人を育てていると判断した。納得できなかった点は、そのような高度な教育がなされているのにそれに値する価値がはっきりしていないこと。大学院レベルであるということを即座にはっきりさせる方向に向けたら良いと感じた。

ブラジルでの教育の目的は、マスターを卒業すると看護大学や大学院の教師、大学病院での看護婦の継続教育の指導者や生涯教育の検討にあたっている。現在ブラジルには43校の大学、11校の大学院がある。大学院はマスター6校、ドクター2校、11校すべてにCNSの大学院コースがある。CNSのコースは実践現場でのより良き技術開発とか専門的知識を深めるためにある。

伊藤暁子：専門看護婦と看護管理者の役割分担について追加発言。CNSの領域について、厚生省のセンターにいた時に理論研究を行った。

看護は、いろいろな健康問題を持っている人がより良い状態で生活適応するために援助することだという認識にたつと次の6領域に分かれるだろう。対象の発達段階から、小児、成人、

老人という領域。精神面も特有の領域。助産婦がやっている母性の領域。集団を指向した公衆衛生看護の領域。この中に、例えば成人領域における人工肛門とかの特定の領域が出てくるかもしれないが。この考えにたち更に、その人達に必要な能力の側面は、看護診断能力、救命救急、精神保健問題、性にかかわる問題、家族関係の問題と巾広い。

婦長業務は、業務管理、チームワーク、医療経済の問題と、又別の能力が期待される。管理者は管理者としての専門性があるといいのではないか。CNSには、実践の看護の力量形成という上で指導的役割、各々の専門領域の現状改善の研究などの役割が荷せられている。

木場富喜（熊本大学教育学部看護課程教授）：将来構想については全体的に賛成である。単位の認定（文部省の方向としてはみえているが）、目標のもてるステップを準備していただきたい。しかし、宇佐美先生が「一生涯、教育されねばならないとは、憂うつな事態」と言われた。基礎教育においても生涯教育においても、その一番基本となるところの人間のもつ可能性というか、自ら何かを求めてゆく楽しみ・意義、そういうものを主体的に考えてゆくことについて、看護はどうなっているのかということを問われているのだと思う。基礎的能力として「読み・書きが大事」と言われたが、看護において生涯教育に生かされる基礎的能力とは何か、それにつなぐ教育は何か、考える必要がある。

伊藤先生のデータの中で、カリキュラムの中に研究に関するものが多い、そして受身であったということが示された。私の経験から、次のことが気になっている。看護界は非常に流行現象が激しいところで、確かに新しい社会の動き、その時に要求されるものに対し真剣にとり組むことはいうまでもないが、しかし、新しいもの、流行現象に多少欲求不満になる面がある。マニュアルの問題も出ていたが、大事なマニュアルは

作らなければならないが、看護界ほどマニュアルの多いところはない。授業分析についての御質問があったが、看護教育の授業分析はなかなかできない。学校においても、病院においても「マニュアル通りやりなさい」という形式の多いのも看護の授業の特徴だと考えている。看護界はその時その時に求められることをきちんとやってきたと思うが、それでよかったのか。基礎教育・生涯教育というのは、基礎教育での基本的態度が一貫して生涯教育につながっていくということである。

宇佐美寛：1. 生涯教育は憂うつだという話だが、私は教育を受ける人間が「これは必要でありがたい」と思わない教育は憂うつなのだろうという話を申し上げた。

2. 私は、教育というのは診断と治療だと思っている。学生をみていてどういうところが足りないのか、なぜ悪いのか、だからどういう働きかけをするかということを看護教育界の方がまず語るべきなのである。それがないと具体的にはどうしたらよいのかは出てこない。私の学部

の学生の例だと、次のようなことを感じている。1) 具体的な経験が少ない。たとえば、文部省から予算の出る宿泊研修があり、何泊かしていろいろな所を見学したり、野外の体験をさせたり、そういうことをすることがあった。そうすると「バーベキューをやる」と言って砂浜に穴を掘り、材木の切れ端などをもってきて火を燃す。しかし、その材木をきちんと、まるで鉛筆の束のように並べて、ちっとも燃えない。「やってみせてやる」と言って空気の通るようにすると燃える。彼らも、燃えるというのは酸化だから酸素がいるということはわかっているが、経験のところが出てこない。そういうことが沢山あるので、具体的経験をさせないといかんと思っていた。2) 今度は描象的なことだが、本を読むということが非常に少い。本だけでなく活字を読んでいない。「毎日、新聞を読んでいる人」

と言って挙手させると1割位しかいない。そんな連中に講義をしてもしょうがないからまず新聞を読めと言うのだが。このような問題を感じている。そう感じたら、それに手をうつべきなのであって、私は次のようにしている。私は文化系の学問の人間であるから、自分の授業で、今、20数冊の文庫本(全部で8千円位)を必読図書にして、試験もそこから出す。とにかく、すすめたって読まないから強制するしかない。たとえば、そういうことを看護教育の方が語っていただけると、またいろいろ話が出るだろうと思う。

3. マニュアルの問題であるが、教育界でも悪いマニュアルというのは沢山ある。たださっき私が言ったのは、研究の仕方についての手引きというか、研究会というのはどのようにやるものかということ、マニュアルというより範例がいくつかあって、それが参考になるものがあればいいなと思っていただけである。

山本勝則(秋田大医療短大 昭和60年度教員講習会受講生)：生涯、教育をされ続けるというのは非常に迷惑な話。生涯、学習するつもりはあるが。

センターでの教育は意欲をもりあげさせるものであった。看護教育の実践にも役立っている。しかし、職場に戻ると次のような問題に直面する。病院での自発的研究のための道は非常に酷しい。組織化された研究委員会の中でなければ動けない。また、短大においても、助手としての仕事が非常に多く、自分で集中して研究できる時間は全くない。専門的研究をするのが困難である。現状では、センターでの教育が優れていればいる程、自分の職場に戻ってのギャップは大きい。

鶴岡藤子(千葉大 看護部長)：看護学部・センターから、刺激はいっぱい受けさせていただいているが、その刺激を実際どう生かしてゆくかということで悩んでいる。長い間千葉大に勤務

し、医師と一緒に仕事をし、勉強もしてきた。そこで、ずっと感じていたことがある。就職する時は、医者と看護婦は同じレベル（実際には異なるが）である。現場では看護婦の方が良く知っていたり、出来たりということもある。しかし、1年たち2年たつと医師は先に進み、看護婦は後に残されてしまっている。この原因は何かと考えると、看護婦は機能的にのみ動き評価していないことだと思う。医師は、自分の行ったことを評価し、評価した結果を発表している。看護婦はそういうことをしてこなかった。看護婦が力をつけてゆくためには、自分が行ったこと、看護した結果を評価し、他者にも評価してもらうという積み重ねをしないといけない。そうしないと自信も持てない、成長もしないということを感じて、院内教育をやっているが、なかなか成果があがらない。

杉森みどり：インターン制度のあった頃の医師達が、学会だとかを利用して1年に1回位集まっておられ、看護部長と同様のことを言っている。「自分達を一人前にしてくれた看護婦がなぜ後の方になってしまうのか、自分達は応援しているのに」と。「個人的に心情的に応援したって、制度ができなければしょうがない」と答えているが。それは、やはり看護婦の養成教育というものを根底からみなおさなければいけない要素があると、長い間思っていた。

佐藤壱三（千葉県立衛生短大 学長）：テーマについては、杉森先生の述べられたことがすべてのようで、これが実現することを心から期待している。ただ、生涯教育の基礎となる教育、宇佐美先生の言われる読み・書きに当たるものが、看護教育では何かが明解でないという気がしないでもない。基礎教育をみても、准看の養成で教えること、専修学校・短大で教えることとどう違いがあるのか、そこがはっきりしないと生涯教育の内容も定まらないのではないかと。先日、放送大学で生涯教育をどうするのかのシンポジ

ウムがあった。非常に技術革進の速い分野では、大学を出て2年もたつと再教育しなければならない状況がある。そのような場合、大学では何を教えるかということ、基礎はシェークスピアをやるしかないという話があった。これは極端な話だが。いったい看護のシェークスピアは何だろうと考えている。そんなことをお考えいただいて、すばらしいセンターにしていきたい。

鶴沢陽子（センター継続研究部助教授）：過去6回の教員講習会受講後の講習生に、センター10周年記念公開シンポジウムの案内に寄せて職業継続、職場移動、役割の有無（基礎・継続教育）、学習・研究の継続状況の実態に加えて、顧みての感想、センターへの要望を調査した。

227名中、回答は97名（42.7%）、うち要望についての記載は20名、以下その紹介である。教育方法・授業研究活動を中心に、教育者教育の機関として、講習会の名称は受講生の実態に即して改称、施設設備は一新してのぞむべき、多くの人に門戸解放、教育年限1年に、ゆとりあるカリキュラム、短期スクーリング（単位積み上げ）、分野別1週～1ヶ月のコースを希望者に、大卒者に修士課程の単位の一部認定、専門分野は選択制に、公開講座・公開シンポジウムの開催、受講後の利用、受講後の調査、近くにセンターの設置を、住居借りやすく、等である。

講習会受講後の働きながらの学習や研究の継続には多くの困難が伴い、改めてセンターへの多くの、強い要望があるものと期待したが、1割弱の数字であった。実態の分析をふまえての数字の持つ意味を考えたい。

松岡淳夫（元センター看護管理研究部教授）：「継続教育」という言葉の使われ方について、一考すべきと考える。

専門職業であり、専門技術を自分達で発展してゆかねばならない看護という職業に就いて、その技術に対する思索と展望・開発の努力がなくなった場合、その人はもう技術者ではなくな

る。技術者がどう自分の技術を考え展開していくかというところに生涯の学習がある。その生涯の学習を、一つの組織として管理してゆくステップ、それが継続教育と考える。看護の組織の中にあるステップというものを念頭に体系をつみあげなければならない。初任者のオリエンテーションも継続教育であるが、管理的視点からするとその継続教育である。組織には管理があって、管理は独立した技術領域である。

生涯学習での意志を個々に持つことと、この管理的継続教育は違うのではないかと考えながら伺った。

宮崎和子（千葉県立衛生短大 教授）：格調の高いディスカッションの中で、具体的な発言をさせていただく。看護管理者の方の出席も多いことなので。

伊藤先生が、院内教育についてのスライドで、看護の機能としての看護診断能力等の能力について示された。その一つ一つの能力がどのようにすれば身につくのかの問題ではないかと伺っ

ていた。今の院内教育のあり方は、マニュアルで、年3日～7日程度の2年目・3年目研修という形で行われていることが多い。動機づけとしてはとてもいいことだし、大事ではある。しかし看護能力を伸ばすためには、日頃行っていることを検証してゆく、事例検討会を継続し、具体的な事例から学ぶあり方が看護婦の継続学習にとって大切であると考えている。いくつかの病院の事例検討会にかかわっていて、そのような所では、看護婦のモラルは高まるし、すばらしい看護婦に育っているという印象をうける。

内海 滉：長時間にわたり御協力ありがとうございます。教育は、宇佐美先生が言われるように広い分野で学習の可能性というものも含めて面倒をみてゆかねばならないと思います。特に、看護は更に広い領域にあり、シェークスピアまで含めて、多種多様な pluripotent な interdisciplinary な探求を深めてゆくことが、センターの役割であろうと考えます。

編 集 後 記

数え切れない論理の中でこの「看護実践研究指導センター」が成立して10年が過ぎた。センターの歴史はわれわれセンターに生きる者の人生である。この10年の足どりは100年にも値しよう。看護実践研究指導センターに生きる者は七たび生まれても看護学の確立を誓う者である。この想いをこめてこの小冊子は完成した。まさにセンター教官全員の手になったものである。各人の苦労をねぎらうと共に、その情熱が世の人の先駆けとならんことを心から願うものである。

編集担当 内海 滉

看護実践研究指導センター年報

創立 10 周年 記念 誌

平成 4 年 3 月 発行

編集兼発行者 千葉大学看護学部附属
看護実践研究指導センター

〒260 千葉市中央区亥鼻 1-8-1

TEL 043-222-7171

印 刷 所 株式会社 正文社

〒260 千葉市中央区都町 2-5-5

TEL 043-233-2235